
精霊の担い手

天剣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

精霊の担い手

【Nコード】

N1288U

【作者名】

天剣

【あらすじ】

「世界」―それは人々の大地となった。「精霊」―それは人々の師となった。「魔力」―それは人々の力となった。

「精霊」と「魔力」によつて「世界」を統治した組織「フェルアン
ト」

それは「精霊」と交わり、「魔力」を授かった戦士、フェルリット
(精霊使い)達の為の組織でもあった。

フェルアントは、若き精霊使いを育てるため、学園を作り出した。
その学園の名は「フェルアント学園」。その学園に、ある世界から
の入学者が現れる時、歴史は動き出す。

作者は別サイトでも投稿しているため、更新は遅い方です。

プロローグ（前書き）

どうも始めまして、天剣てんけんと申します。

至らない所もあり、駄作になってしまいますが、それでも読んでいただけたら幸いです。

ちなみに、プロローグは短いです。（ギリギリ200越え）

プロローグ

「世界」―それは人々の大地となった。「精霊」―それは人々の師となった。「魔力」―それは人々の力となった。

「精霊」と「魔力」によって「世界」を統治した組織「フェルアント」

それは「精霊」と交わり、「魔力」を授かった戦士、フェルリット（精霊使い）達の為の組織でもあった。

フェルアントは、若き精霊使いを育てるため、学園を作り出した。その学園の名は「フェルアント学園」。その学園に、ある世界からの入学者が現れる時、歴史は動き出す。

ブログ（後書き）

ブログだけ。うん、やはり短い。（泣き）

第1話 始まり（前書き）

第1話 始まり

異世界フェルアントー いや、異世界という表現は失礼かもしれ無いなど、少年は思った。

（何故だ？）

唐突に頭の中に響いた声に、少年――桐生きりゅうタクトは心の中で返した。

（僕にとってみればここは異世界だけど、ここの人たちにとってみれば僕のいた世界が異世界…。そう思ったから）

そう。タクトからしてみれば、紛れもなく異世界なのだ。――地球という世界出身である身からしてみれば。

そんな返答に、頭の中の声は、若干呆れた感じで答えた。

（……相変わらずだな。私には理解できん）

（まあコウにとってみればね。でもそう言う物なんだよ、生まれたところに愛着がわいて…ね）

頭に直接響く声――コウにタクトはそう返した。

男性にしては長いセミロングの黒髪であり、中性的な顔立ちをしている。おまけに背も低く、スラッとした体型の為、少女に間違われたのは一度や二度ではない。

フェルアント学園の男子制服を着ていても、だ。

そんな外見的特徴をしているタクトは、周りの通行人達がチラチラと見てくるが、コウと話し込んでいてそれに気づいていない。

（…そう言えばタクト、じー）

「おい、タクト！ 何してんだ！」

（――は大丈夫か）

（…………… コウ、今なんて言ったの？）

背後から聞こえた声を聞き、ああ、あいつの声だ、と思い。

その声を完璧無視。コウとの会話に専念する。

（いや、だからじー）

「おい、無視すんなー！！」

「いつー！！」

いきなり背中をドンと叩かれた。

地味に痛くて、タクトは叩かれた所をなで、顔をしかめながら後ろを振り向いた。

そこには学園の制服を着た、見慣れた茶髪で長身の親友がいた。

顔立ちは男らしく整っており、その背の高さから17、18歳に見られることがある。

少女に見られることがあるタクトとは、対極にいる存在である。ちなみに、二人とも15歳である――タクトはもうすぐ16歳だが、ともあれ、タクトは顔をしかめながら親友をにらんだ。

「いてててて…。…お前少し加減ていうのを覚えた方が…」

「なんだ、加減したら何発叩いても良いのか？マゾなのか、お前」
「違うわー！！」

親友――宮藤マモルの言葉を即答で否定した。

ハァーとため息をつきながら、タクトは話しかけた。

「一体どうしたの？学園に行くとしても、時間ならまだ…」

(…タクト、さっきから言いそびれているのだが…)

(？ 何？)

ああ、さっきコウが何か言ようとしていたな思い出す。

コウが重々しく話し出す。

(時間がない)

「へっ？」

何とも間抜けな声が出た。

一瞬、コウが何言ったのか理解できなかったが…数秒たつと、その言葉の意味を理解し。

マモルに話しかけた。

「……いま、何時？」

「えーと……式が始まるまで、あと5分」

「……………」

腕時計を確認したマモルから、時間を告げられ。

沈黙。――そして呆然と。

今のタクトを形容するならば、この二つが最も相応しいだろう。

そんなタクトを見て、マモルはシュツと敬礼じみた動きで手を振り。

「では、さらば！」

言うが早いか、そのままタクトに背を向け、全速力で走り出した。それを呆然と見送り――数秒後、我に返ったタクトも全力で走り出した。

「ま、待てー！ー！」

~~~~~

遅いなー、あの二人…。

フェルアント学園玄関前。そこで一人の少女は待ちぼうけを食らっていた。

フェルアント学園の女子制服を着た、長い黒髪を首の後ろ辺りで軽く一つにまとめた、顔立ちの整った少女だった。

今日はフェルアント学園の入学式なのだ。そんな日に遅刻とは……と、思わなくは無いのだが。

少女ー鈴野レナはそう思っていない。

「まあ、あの二人のことだから、何とかして間に合わせるよね」  
(そうだと思うよ)

レナの一人言に、頭の中の声が答えた。  
それを聞いて、レナはフツと微笑んだ。

どうやらレナも謎の声も、その二人の事を信用しているらしい。

だがその信用も、腕時計を見た瞬間、失いそうになった。

入学式が始まるまで、あと2分。

かなりギリギリである。流石にこれ以上は待てないと思ったのか、謎の声が呼びかける。

(…流石にヤバイよ。もう戻る)

「うーん……。あと1分」

だが、レナは待つ方を選んだ。ー1分だけだが。

彼女の頑固さは知っているのか、謎の声は押し黙った。――もし動けるのであれば、やれやれと肩を竦めていそうである。

10秒経過――何も起こらない。

20秒経過――遠くの方で足音が聞こえた。

30秒経過。

「と、とーちゃーく!」

人差し指をピツと伸ばし、一位をとったぞ、と言つような表情でマモルが玄関から入ってきた。

だが、その彼を押しつけてタクトが続けて入ってきた。

「ぜえ、ぜえ…」

「おいおい…」

マモルは膝に両手をついて肩で息をしているのだが、タクトは息を乱すどころか、表情は涼しいままである。

そんなマモルに、タクトは冷ややかに言う。

「これぐらいで息を乱すなら、もう少し鍛えた方がいいよ」

「ハア、ハア。フ、魔力の扱いが無駄にうまい、剣術基本の体力バカ。精霊使いとしては常識はずれのお前に、言われたくない」

それを聞いて、タクトはムツとした。――確かに精霊使いとしては、剣術基本の体力バカは常識はずれなのだが。

詰まるところ、バカと言われたのである。

タクトが何か言い返そうと口を開く――よりも早く、レナが割って入った。

「あのー二人とも。そろそろ時間が……」

彼女はあははと笑いながら言っているが、顔が明らかに引きつっている。

顔が引きつっているのは、男二人も同じであつた。そしてー！。

コンコンコン

三人の故郷である地球とは違うが、紛れもない、チャイムの音が鳴り響いた。

「急ぐぞー!!」

マモルは叫ぶなり再び全力で走り出した。あとの二人も、それに負けじと走り出した。

## 第2話 門出（前書き）

うーん……。

これ、下書きするってできないですかね？

## 第2話 門出

精霊――それは人々の師となった存在であり、また、人々に宿るものでもある。

彼らを宿した者は、宿した証として体に証印が浮かび上がる。

それ故、証印を持つ者は精霊使いと呼ばれている。

精霊使いの端くれたるタクトも、左の手のひらに証印を宿していた。そして、タクトは今――。

教室の席に悠々と座っていた。

結局、フェルアント学園の入学式にはギリギリで間に合い、学園の校長先生のありがたい長話を聞き終えていた。

時に彼は思う。――何故、こういう時の校長の話は長いのだろうか、と。

式は全てつつがなく終了し、教室に入ってきた、と言うわけである。

「なんかさー。…どこの校長も、話って長いのかな？」

「校長先生みんながみんな長い訳じゃないと思うよ」

机の上でだべっているタクトの呟きにレナが答えた。

と、そこでマモルが何故か哀愁漂う表情でため息をついた。

「まあ…あいつよりはマシだろ…」

「ああ……うん…」

マモルのその言葉に、タクトは重々しく頷いた。

あいつというのは、彼らの中学時代の校長である。――つい一ヶ月前の卒業式でも、えらい目に遭った。

レナはそんな二人を見て乾いた笑みを上げた。その時。

いきなり教室の扉がガラツと開いた。

何事かと、クラス中の生徒がそちらを向いた。

入ってきた人物――女性だ――を見て、レナは二人に話しかけた。

「先生かな？」

「多分」

「…二人とも、席に着いた方がいいよ」

元から座っているタクトはそう二人に告げ、そのまま二人が席に着くのを目で追った。

女性教師（多分）は教室をぐるりと見渡し、未だ立っている生徒に一喝した。

「さっさと座れ！！」

すさまじいまでに迫力ある、良く通る声だった。

実際、タクトはあんな声で怒られたくないな、等と情けないことを思った。

それほどまでに、体に直接響く声だった。

そんな声で怒鳴られた生徒達は、一瞬だけ硬直、しかしすぐに席に着いた。

「よし、席に着いたな。これからホームルームを始める」

席に着いたと言うよりも、着かされた感があるのだが、流石にそこに突っ込む者はいない。

女性教師は実にてきぱきとした動きで自己紹介を始めた。

「本日から一年間、このクラスの担任であり、反抗期まった中にいるお前達の世話をする事になったシュリア・ローファだ」

それを聞いて、何という男前な、と思った。

しかし、言動とは裏腹に、シュリアはとても見栄えのする美人であった。

ウェーブのかかった、青い髪を背中の中程にまで伸ばし、背もそれなりに高い。

スタイルも抜群であり、切れ長の目が気の強さを予想させ、一言で形容するならば女王様、と言ったところか。

クラスの者――特に女子達からはその男前な台詞か、その美貌故かあこがれと賞賛の眼差しを向けていたが、その視線に気づいていないのか、はたまた無視をしているのかは分からないが、シュリアは話し始めた。

「反抗したいのならしてもいいさ。だが、やるとしたら最後までやり通せよ？」

そう言つて、クラス内をぐるりと一睨みした。

その視線と、その言葉だけで、逆らう気なんて起きはしませんよ。

シュリアの言葉を聞いたタクトは、内心苦笑しながら思った。――内心苦笑する程度ですむその精神力を見習いたい。

（てかここ、あの先生の独裁になるんじゃないか？）

（…それはないと思う……多分）

彼の思いに精霊コウは、そんな事はないと言い切れない様子だった。シュリアはついではかりにあたりを見渡した。

「それからもう一つある。ここは集団での共同の場所であり、それ故ルールも必ずある。そのルールも守れよ？何せ、式が始まる一分前に来た奴もいるからな」

（う……。すいませんでした……）

ポーカーフェイスを繕いながらも、汗ジトになって心の中で頭を下げた。

ふと、自分と同じく一分前に来た奴に視線を向ける。

レナは――顔を俯かせている。おそらく、自分と同じように悪いことをしたなと言う良心の呵責を感じているのだろ。あいつは真面目だから。

一方親友であるマモルは、「誰だそいつ」とでも言いたそうな表情であたりを観察している。

（てかお前もだよ！？）

そう突っ込んだ後、タクトは誰にも見つからないようそつとため息をついた。

## 第2話 門出（後書き）

感想、アドバイスお待ちしております！

### 第3話 寢床へ 1（前書き）

…… 1つてなに？

いや、すいません 不定期更新とか言っておきながら、出来るだけ  
守りたいんで

字数は少ないですが……（泣き

### 第3話 寢床へ 1

その後、何事もなくホームルームは終了し、各自解散となった。が、シユリアは解散の前に生徒に伝えたことがあり、

「入寮する者は各自で寮の部屋割を見るように」

とのことだった。

無論タクト達は寮である。必然的に見なくてはならない――そう、必然的に。

だが、世の中そう上手く行くわけではない。

時にはこれで終わりと思っていたのに、急に増えたり。

時には簡単だと思っていたのに、どこかで迷ったり。

つまり、何が言いたいのかと言うと。

「……迷った」

と言うわけである。――例えば表すならば、完璧後者である。マモルのその一言を聞いて、タクトとレナはため息をついた。

「もー。だからこっちだつて行つたんだよー」

「まったく、マモルの勘は当てにならないね」

レナには頬を膨らませてそう愚痴られ、タクトからはそのような酷評を受ける。

――全くその通りなので、マモルも言い返す事が出来ない。うっと唸り、マモルは一步後ずさりする。

「だ、だったら次はこっ――」

「そっちはさつき行つたよ」

若干焦った感じで彼は指を指すが、タクトは皆まで言わせない。バツサリと両断し、タクトはため息をついた。

「はあー。…しょうがない、戻ろっか」

彼はそう言つと、踵を返し来た道を戻り始めた。その後にレナが続き、一番最後にがつくりと頭を垂れたマモルがとぼとぼと歩き出した。

タクトは後ろをチラツと見て、再度ため息をついた。

余程自信があつたのか、とタクトはとても落ち込んだ様子で歩くマモルを見て思った。レナもそんな感じで彼を見ていが、苦笑いを浮かべながら、

「マ、マモル。そのうち良いことあるよ」

「そのうち？」

「あ、いや、その……」

若干ずれた励ましを送るレナに、タクトは思わず突っ込んだ。あたふたと慌て始めたレナを見て、タクトは苦笑する。

「まあ、そのうち良いことあるのは確かだけどな。マモルもあまり気にしない方が……」

「……」

「？ マモル？」

レナへのフォローをしつつ、タクトはそう言ったが、肝心のマモルは聞いていなかった。

どうしたんだろう、と二人は顔を見合わせー。

突然、マモルは走り出した。それもかなりのスピードで。呆然とする二人をよそに、マモルは床に落ちている物をひつつからだ。

「！ やっぱし！！」

彼が手にした物とは――。

フェルアントで使われている硬貨――日本円で換算すると五百円――だった。

それを手にするなり、マモルはこぶし天に突き出し。いきなり、うるさすぎるほどの大きな声で叫びだした。

「iiiiii やったぜ――！！」

――その光景を見て、タクトとレナを再度顔を見合わせ、深いため息をついた。

「……知り合いに思われたくないから、行こうか」  
「うん」

すでに「何事かつ」と集まり始めた人ばかりを見て、タクトはそう提案し、レナは即答で答えた。

二人は出来るだけ「あの人とは関係有りませんよ」と言う雰囲気を出し、そそくさとその場を後にした。

――それなりに距離をとった後、二人は一瞬だけ振り返り。そしてある人を見つけ、再び歩き出した。

集まってきた人だかりの中に、彼らの担任であるシュリアがいた。決して長いとは言えないが、あれだけインパクトのある対面だったのだ。彼女の性格はある程度分かった。よって、二人はこれから起こりそうな出来事を予想し――。



第3話 寢床へ 1（後書き）

マモル……ドンマイ。

そして次は2です。

### 第3話 寢床へ 2（前書き）

やっと終わったよ、第3話…。

最後の方で、コウがやっちゃいます。（笑

### 第3話 寢床へ 2

「やっぱしここだ」

部屋割り表が貼られた大広間に到着するなり、タクトは表を指さしてレナに話しかけた。

レナは軽く息をはきながら頷き、

「やっと着いたよ。…マモル、大丈夫かな？」

後ろを振り返りながら、もう一人の親友の事を口に出した。――口に出した途端、急に見捨てたような気がして、良心がチクツと痛んだ。

その言葉を聞いて、タクトは腕を組んでうーんつと唸る。

「……多分、明日がきついただけだと思うよ？」

呟いたその言葉にレナは首をかしげ、タクトを突つついた。

「それ、どういう事？」

「筋肉痛…かな？」

軽く笑いながら肩を竦め、タクトはそう言った。それを聞いて、レナにもようやく合点がいった。確かに、明日はきつそうだ。――肉体的にも、そして彼は言わなかったが、精神的にも。

「自業自得でしょ」

「それはいくらなんでもひどいよ」

タクトの言葉にそう言いつつも、レナ自身が笑っているのであまり説得力がない。

(…レナ。説得力がないよ)

彼女が宿す精霊にまで咎められる。徐々に笑いを収めつつ、

(そうだね、ごめん)

そう頭の中で呟いた。

隣でタクトがふうーっと息をはき出し、壁に貼られている部屋割り表に足を向けた。

歩き出した彼の後ろ姿を見て、レナは微笑んだ。彼女はタクトに追いつこうと歩き出し、セミロングの髪を揺らしながら歩く彼の背中を見続けた。

~~~~~

表にはたくさんのお名前が書かれていた。ーー当然である。異世界は、無数にあるのだから。

ともあれ、これだけの量の名前があるのだから、人が大勢いてもおかしくはないー二人はそう思っていた。だが、さっき迷ったおかげでピーク時は過ぎてしまったらしく、人影はあまりいなかった。

二人ともそのことにはマモルに感謝しつつ、歩くスピードは同じなので、先に歩き出したタクトがレナより先に部屋割り表を見ることがになる。後から追いついたレナも、表に目をやりながら話しかける。

「タクト、見つかった？」

「いや、まだーあつた」

見つけていないと言おうとしたが、それよりも早く見つけることができた。

レナがどこか聞いてきたので、指さして見せた。隣に書かれた番号を見て、声に出して読んでみる。

「えーっと、1622号室…だって。レナは？」

「あたしはねえ…1627号室。あ、近いんだ」

タクトの方を向いてニツコリと笑いつつ、彼女は嬉しそうにそう言った。その笑みにつられてタクトも微笑み、ついでとばかりに呟いた。

「マモルの部屋も見つけとくか」

「マモルの部屋？それならさっき……」

そう言いながら、レナは表に書かれた名前を追いながら確認していく。それはタクトも同じであった。

どんどん読み進めていくうちに、ホントにいろんな名前があると、いらん事を考えていた。

（タクト。真面目に探せ）

しまいにはコウにまで怒られる。はいはい、と頷きながら再度探し始め――。

「見つけたよ――」

レナの方が先に見つけた。

「どこ？」

「ほらあそこ。えつとー、1623号室。タクトの隣？」

「向かいかもね」

レナの質問にタクトはそう言つて、踵を返す。いきなり後ろを向いたことに驚き、レナも慌てて振り返った。

「ちょ、どこ行くの？」

「部屋。疲れたからね、場所もわかつたし」

「…鍵、もらわないの？」

「……もらいます」

あつさりと振り返り、鍵をもらつたためタクトは歩き出した。それを見て、レナが一言。

「おつちょこちよいだね」

「…」

返す言葉もなく、タクトはため息をついて答えた。

~~~~~

宿舎は外にあるためタクト達は一度校外へと出た。途中、すごくげんなりした様子のマモルとすれ違い、その時に声をかけたが、ただ虚ろな表情で首を振っただけだった。

それはともかく、二人は宿舎に来ていたのだが、その宿舎。とてつもないほど大きく、高級ホテルもかくやと言つほどであった。そのためタクトとレナは宿舎を見上げ、唖然としていた。

「すごいね、ここ」

レナにそう呼びかけたが、反応はなく、未だ呆然と見上げるだけだった。

「おーい」

再度呼びかけ、レナの目の前に向き直り手を振ると、やっと彼女が反応した。

「…え、何…って！」

いつの間にか二人の顔が近くにあることに気づき、急にレナは顔を赤くして一方後ろに下がった。その様子を見たタクトは首をかしげる。

「？ どうしたの？」

「な、何でもない！」

レナは顔を赤くしたまま両手をぶんぶん振って否定する。――その様子にただただ困惑の表情をつかべるタクトである。

「？ まあいいや。行こうか」

そう言ってその宿舎に入っていった。

二人の部屋があるのは六階であり、そこに行くのに魔力を動力にしたエレベーターを使った。――電気を使わないので、環境にとってもなく良い。

そのエレベーターは音もなくスーッと上がり、お目当ての六階で止

まった。

その後、レナと別れ、一人部屋に向かった。

「えつとー、1622号室は…」

通路にある番号を見ながら自身の部屋を探すタクト。ラッキーな事にすぐ近くにあった。

早速鍵を開けて中に入る。

「うあー…。せまつ」

それがその部屋の第一印象であった。

部屋の中には最低限の物しかなく、目立つ物は衣装ケースとベット、椅子と机が一组。それだけであった。

最も、フェルアント学園の生徒数は軽く千人を超えるため、一人一人に個室が与えられるだけまだマシだろう。

タクトはそう思い、一つ頷く。その後、紋章が描かれた左手を開き。

「もう良いよ、コウ」

そう言うなり、彼の手のひらに描かれた紋章と同じ物ーこちらの方が大きいがーが現れる。

それは円形の形をしており、見る人が見ればこう言うだろうー魔方陣と。

魔方陣が白く光なり、陣から一匹の赤い小鳥が現れる。完全に現れると、小鳥は翼を広げそのまま飛翔、タクトの肩に止まる。

「ふむ、やはり自由に動けるのは素晴らしいな」

「…流石鳥。縛られるのは嫌いなんだ？」

「当たり前だ」

赤い小鳥――コウは、首を回しながらそう答えた。

### 第3話 寝床へ 2（後書き）

どうでした？

コウの意外な正体。…どうでも良いか（オイ

本音を言えば…戦闘シーンはまだか！！

#### 第4話 部屋に集いしトリオ（前書き）

風邪って怖いですね……

そのせいで題名書き忘れました…（訂正しました）

では、第4話、始めます。

## 第4話 部屋に集いしトリオ

精霊というのは、半生半霊体である。つまり、半分は実体を持ちもう半分はエネルギー体である。そのエネルギーが魔力である。

そして、そのエネルギーである魔力は使うことにより何かを生み出すことが可能なのだ。ならば、その魔力で”足りないもう半分”の実体を生み出せばどうなるか。

それは今、タクトの肩に止まっている精霊を見ればわかるだろう。

精霊の実体化、精霊召喚フェルリットー精霊使いが扱う術の一つでもある。

肩に止まったコウをそのままに、タクトは着々と部屋の整理をしていた。なにせ、これから学園を卒業するまでの間お世話になる部屋だ。それなりに扱いやすくしたい。

「…よし、これできれいになった」と。それにしても、狭いな」

「あたしの部屋もこんな感じだったよ？」

手をパンパンとたたきながらそう言うタクトの後ろで、聞き慣れた声が出た。

振り返ってみると、そこにはベットに腰掛けながらこちらを見上げているレナがいる。

…おかしい、扉が開いた音はしなかった。

確認のために扉の方に目を向け、そして再びレナに視線を合わせる。一度目をしばたき、ため息をついた。

「レナ、どうやって入ったのさ？」

「さあ、どうやったんでしょう？」

疑問を疑問で返すレナ。肩をすくめる彼女に、タクトの肩にいるコウがしんみりと言いつつ放った。

「術を使っただろう、お前」

「……………」

わかりやすいまでの反応を見せてくれた。つまり、黙ったまま急にそっぽを向いたのだ。

呆れたようにため息などをついて見せ、次には何かに気づいたように二人に話しかけた。

「…なんで術を使っただのか聞きたいところではあるが、二人とも」

「な、何？」

「どうしたのさ？」

コウの言葉にレナとタクトが返事をする。コウはタクトの肩からパツと飛び、そのままベットのの上、つまりレナの隣にある何かをサツと口端にくわえた。

そのままバサバサと翼を動かしながら二人が見える位置で滞空する。

「これ、どうするのだ？」

コウがくわえたそれ。それはなんと。

「あつ」

それを見て、レナは指差しながら小さく叫んだ。タクトはうんうん頷いて、

「うん、それな。早く持ち主が来ないかな」

などと迷惑そうに言っていた。口調からそのようなことを感じ取っ

たのか、レナはタクトの服の裾を引っ張り、さすがにヒドイと注意しようとする。

その時――

いきなり、部屋の扉が蹴り破られた。

それは、少なくとも顔の知らない――いや、たとえ知っていてもやっではない。

しかも、その開けられ方はかなり勢いよく開けられたようで、扉が微かに軋みをあげた。思わず、壊れてないか心配になったほどだ。それはともかく、いきなりの乱入者はめちゃくちゃ不機嫌そうだった。無言でタクトの部屋に侵入、途中でコウがくわえているそれを見て、不機嫌な顔をひどくさせる。

口の端に引きつった笑みを浮かべ、乱入者――マモルはタクトに問いかける。

「やっぱしお前か…俺の部屋の鍵とったのは」

もはや問いかけではなく、断定した口調だった。

コウが今くわえている物、それはマモルの部屋の鍵だった。

彼の口調に、流石に危機感を感じ、タクトは口を開く。

「い、いや、ほら、マモル廊下ですれ違った時、沈んだ表情してただろ？なんかいやな予感がしてさ、そうなる前に鍵を僕が預かったこうかなって」

若干こめかみをピクピクさせ、マモルは言った。

「ほうほう、そのいやな予感とは？」

「鍵をなくすとか、落とすとか……」

「お前、俺を馬鹿にしてるだろ」

即答で言いつつ、どこから出したのか、ゴツイ銃をタクトの額に突きつけた。顔を青くし、タクトは降参の証として両手を挙げた。顔を見事に引きつられているタクトに向かって、マモルはにっこりと笑った。

「で、本音は？」

「……悪戯心が沸いたからです」

答えた瞬間、銃のプリップ部分で頭をガンツとたたかれた。頭に激痛が走り、タクトは手で押さえつつその場にしゃがみ込む。

「つゝゝゝ…背縮む…」

などと小さく漏らし、マモルとコウはふうつとため息をつく。

ことの成り行きを見守っていたレナは、はははっと苦笑いを浮かべ、さっと立ち上がる。

「じゃ、あたしも戻るね」

そう言くと、彼女は小さくぶつぶつと何かを言い始め、足下に魔方阵が展開される。魔方阵からあふれ出る光が彼女を覆う。一度点滅すると、パツと光がはじけ飛んだ。

そこにはもう、レナの姿はなかった。

一連の動作を見ていたマモルは、えっと言う顔をする。

「…あいつ、なんで転移使ってんの？」

「部屋を見られたくないのではないか？」

コウの言葉を聞いて、マモルは理解した表情となる。

昔彼女は言っていた。――乙女の部屋は、秘密である、と。

痛みで悶絶しているタクトを尻目に、マモルはコウに片手をあげる。

「じゃあ俺も部屋に戻るわ。お休み」

「ああ、お休み」

そう言って、コウはマモルに鍵を渡し、彼が出て行くのを見送った。

## 第5話 一日の終わりと始まり（前書き）

第5話です！！

いろいろと伏線が…！！

## 第5話 一日の終わりと始まり

「それで、どうですか。今年の入学者は？」

フェルアント学園の職員室にて、1年担当のシュリアはそんなことを言われた。

時刻は夕暮れ。ちょうど、一人の馬鹿<sup>マモル</sup>を折檻し終え、そこに戻ってきたところだ。

ともあれ、シュリアはそれを聞いてきたジム先生にふむっとうなずき、

「そうですね、入試の結果を見るに、ほとんどがひよっこです。ですが数名、”即戦力”になる奴がいますね」

それを聞いて、おおーっとそこらかしこから驚嘆の声が上がった。なにせ、そのように評価したのだ。――特に、そう言う面では人を見る目があるシュリアが。

聞いてきたジム先生がにこにこ顔で、

「ほほー、即戦力ですか。ちなみに、名前を聞いても……？」

「……良いですけど、腰を抜かさないで下さいよ？」

シュリアから名簿を貰いつつ、謎かけのような言葉に眉をひそめる。一体、どう言うことなのだろうか。――その答えは、すぐに出た。

「…桐生タクト、鈴野レナ、アイギット・スチム・ファールド、宮藤マモル、コルダ・モランの五人ですか。……って、え？」

名簿に書かれた名を読み上げ、それと同時にあることを思い出す。顔を、まるで冷水を浴びせられたかのように青くし、ジム先生は目を見開く。

「き、桐生って、あの？あの桐生？ですか？」

「…本人にも確認を取りましたが、”あの”桐生です」

「…まあ甥っ子みたいですが。ジム先生がその言葉を聞いたかどうかは定かではない。名簿をシュリアに返した後、ふらふら…とした足取りでどこかへ行ってしまった。

彼が聞きたかったのは、甥っ子がこのころではないだろうが。とにかく、ジム先生を見送った後、シュリアは無表情のまま自分の机へストツと座り、

「ジム先生どうしたんですか？顔色が優れませんでしたけど…」

突然、隣から1年副担当である西村キミコから話しかけられた。1名前からわかるとおり、地球出身である。

栗色のポニーテールを揺らしながら話しかけてくる彼女に、

「…いや、何。コレを見たらわかるだろう」

そう言って、ジム先生が見ていた名簿を差し出した。

「…桐生って、あのですか？」

その言葉に、シュリアはただうなずくのみ。西村先生はへえーっと相づちを打ち、

「従弟いとこですか、”彼”の」

「ああ、そうらしい」

そう言いながら、シュリアはうつすらと笑いを浮かべる。――ジム先生が聞いたかったのは、このことだろう。

”あれの従弟か”と言うことを。

西村先生が乾いた笑い声を上げつつ、

「大変ですね、ジム先生。……彼にはいろいろと手を焼かせせましたから……」

「そうだな。おかげで……」

そう言いつつ、二人はそつとジム先生の方を見る。――特に、頭を。

「……かなり寂しくなったな」

「シュリア先生、それは」

西村先生が、シュリアの言葉を首を振っていさめる。――そこには、苦労人の姿があった。

~~~~~

翌日の早朝。タクトはうーんつと唸りながら予定表を見ていた。

フェルアント学園には、様々な教科がある。魔力の使い方、魔術の使用法といった物や戦闘系、模擬戦まで。しかも、一言で戦闘と言っても、その中には剣術や槍術、格闘術など、細かく分けられる。それら一つ一つを取っていたら、卒業はおろか、進級すらできない。なので、学園側としては決められた単位を取れば良いことになっている。

タクトの目の前にある予定表――そこには、至る所に丸で囲っている箇所があった。主に魔力講座や物理戦闘（魔力を一切使わない）、

魔力戦闘（魔力を使って）、模擬戦、刀術。そう言った”体育会系の授業にチエックが入っている。
それを見て、召喚されたコウが一言。

「… 学問が少ないな」
「うっ……」

肩に止まっている相棒からの言葉に、タクトは言葉を詰まらせる。
「確かに少ない、と彼も思っている。何せ五つの中で、彼の言う”学問”は一つしかないのだ。
いや、だけどーっとタクトはつぶやく。

「僕が魔術ダメなの知ってるでしょ。ほかに選べる物がないよ」
「だったら、歴史とかを選ぶしかないな」

その言葉を聞いて、口を半開きにしてタクトは目を見開く。ううつと半分涙目になりつつも”歴史”の授業に丸をつけた。
彼の一連の動作を見ていたコウは、ふうつとため息を漏らし、

「そんなにいやなのか？」
「いや、歴史はそんなにいやって訳じゃ…」
「魔術の方だ」

タクトが苦笑いを浮かべながら否定するが、コウはそのことじゃないとばかりに首を振る。

「まだ、使えないのか？」
「使えないよ」

「ー即答だった。コウの問いかけに、見事なまでに。」

答えを聞いて呆れたのか、やはり、とつぶやき、

「まあいい。私は寝る」

そう言うと、コウの足下、つまりタクトの肩ら辺に白い魔方陣が浮かび上がり、赤い小鳥はその中に沈みゆくようにして消えていった。その光景を見ていたタクトは、ため息を一つ漏らし、持っていたバッグに荷物を入れ、準備する。

――長い一日の始まりだった。

第6話 授業風景 ～模擬戦1～（前書き）

天剣でっす

ようやく、戦闘っと思いきや。

うっ、相変わらず文を長く、そしてうまく書けない……。

第6話 授業風景 ー模擬戦1ー

(……なんでこうなったの?)

タクトは片手に刀ー日本刀を持ち、目の前にいるシュリア先生を何ともいえない表情で眺めながらそう思った。

彼女は今、両手に似つかわしくない槍を持ち、タクトにその切っ先を向けている。

「どうした?あまり不拔けた顔をしていると気絶させるぞ」
「めちゃくちゃですよ」

その発言にため息を漏らしながらタクトは刀を両手で構えた。
正直、かなり嫌々である。

しかし引くわけにはいかず、彼は今、自分の担任に刃を向ける。

「桐生くん、がんばってー!」
「応援してるよー!」

と言った、女子生徒の力の入った声援や、

「がんばれ桐生」
「負けたら地獄を見るぞ」

男子生徒の不拔けた声援。それはまだ良い。ーーまだ、良心がある証拠だ、と。

その声援を送っている隣ではー。

「桐生君、がんばらなくて良いんだよ！」

「と言うか負けて!!」

「ねえねえ、この服似合うと思う?」

「うーん、それも良いけど、私的にはこっちな?」

一部の女子生徒が、様々な服を眺めながらそう言っていた。

その様々な服――端的に言うと、女物だった。

フェルアント学園の女子制服やら、フリルのたくさんついた上着やらスカートやら。

それらをちらりと見やり、タクトはその服らをズタズタにしてやりたいと言う感情が吹き出す。

体が先ほどからぶるぶる震えているが、それすらも無理矢理押さえ込み。

――代わりに、刀を握る手に力を込める。

早く始めましょう――そう言いたいのだが、その前に一つ聞きたいこと――と言うか頼みたいことがあった。

「…後生の頼みです、手加減してくれませんか?」

「断る。お前、さっきの言葉の意味、理解したか?」

「……うっ」

切実に訴えた頼みも、即答で跳ね返され、その目に涙をにじませる。自分でもかなり情けないと思いつつ、しかし恥を忍んで言ったのだ。即答だと、なかなかにくる物があった。

だが、タクトは気づいていないが、涙目になった彼は小動物のような愛くるしさがあり――

「ああ、泣いてる!」

「…かわいい…」

ー今すぐにも帰りたくなった。

隅の方で男としてのプライドをずたばろにすることをほざいている奴らを見、助けを求めるべく男子の方に目を向けるがー！。

『がんばれ』

声に出さずに、哀れみを視線に込めながらグツと親指を突き出す男子達。

それを見て、ああ、味方がいない、とあきらめた。まさに四面楚歌とはこのことか。

（ああ、もういい。やけくそだ！負けたら、その時はその時だ！）

もはや楽観的ーーと言いか自暴自棄になり、タクトはふうつとため息を一つ吐き。

「…お願いします！」

そう言つて、シュリア先生に対し、刀を向けた。

~~~~~

タクトが戦うことになった数分前。

そこでは、こんなやりとりがあった。

「それでは授業を始める…と言つても、模擬戦だな」

とりあえず、模擬戦の授業を選択したタクトは、予定表に書かれていた通り、第二アリーナと言つところにやって来た。

ちなみに、外に建てられていたため、先輩方に場所を聞かなければ

わからなかったであろう。

それはともかく、やって来たタクトは同じく模擬戦を選択した人たちと談笑しつつ待っていると、槍を片手にしたシュリア先生が現れ、そんなことを言っていた。

（いきなり模擬戦？）

本日はまだ一講義であり、とりあえずルール説明やら何やらだと思っていたが、どうやら甘かったようだ。

いきなりの模擬戦に、クラス内は一時騒然となったが、シュリア先生が槍の石突きをターンっと打ち付けると急に静かになった。彼女は一つ頷くと、

「模擬戦は、文字通り擬似的に戦うと言うことだ。変に傷を負わぬよう、刀剣系の”証”を持つ奴は予め刃を潰しておくように」

それだけ言っと、今度は生徒達をまじまじと見つめる。

「ふむ……。……む」

どうやら他の生徒は目が合ったとたん剃らしていたようで顔を俯かせる人が多かった。

ここでみんなの方を見ていたタクトはそれを確認すると、いきなりやりたくないよな、と内心でため息をつき、顔を戻す——途中で、シュリア先生と目があった。

「よし、桐生タクト……だったな。お前だ」

目が合ったことにより、模擬戦の相手に選ばれてしまった。

「え、僕ですか？」

「桐生タクトはお前しかいないだろ。……そういえばお前、試験の時高得点だったな。ちょうど良い」

確認の言葉を一蹴すると、今思い出したかのように呟いた。

それを聞いた生徒達が「本当か？」と言うように詰め寄る。だが、そのこと自体タクトにとって初耳である。

代わりにタクトの方が、

「それ、本当なんですか？」

と聞いてしまったほどだ。

タクトの問いかけに軽く頷くシュリア先生。――どうやら事実のようだ。

おおーと驚く暇もなく、無情にもシュリア先生は、

「と言うわけだから前へ出る」

それだけ言うと、アリーナに八つほどあるコートの内、一番近くにある所を陣取る。

仕方ない、と思いつつもタクトはシュリア先生の目の前へと歩み寄り。

――ここで、彼女は爆弾発言をした。

そうだ、とまるで言い忘れていたことがあるというふうに一つ頷き、

「この模擬戦が、私が満足できるような戦いではなかったら、お前には女装をしてもらうからな」

（はい？）

一瞬、彼女が何を言ったのか理解できなかった。  
しかし、一秒ずつたつにつれ、タクトは顔をしかめていきーその  
代わりと言つべきか、周りの女子達が騒ぎ出した。

「う、うそ！女装！？誰が……って、結構いけるんじゃない！？」

一人の女子が、タクトの顔を見るなり、いきなり声を張り上げ、

「シュリア先生！女装用の道具って何処にあるんですか！？」

「ふむ、そこにある」

別の誰かがそう言つと、シュリア先生はやや離れた場所にあるそこ  
ー服やら何やらがあるーを指さした。すると、女子達がキャー  
キャーはしゃぎながらそこへと向かっていった。

「って、ちょっと待ってくださいーい！！」

タクトはあらん限りの声を張り上げ、シュリア先生に講義する。

「なんで僕が女装しなきゃならないんですか！？」

「……少し落ち着け、桐生」

そう言つと、シュリア先生はこほんと咳払いをし、

「私はこう言つたはずだ。満足できるような戦い、と。つまり、  
全力を出して戦え」、と言つことだ」

まるで謎かけのような言葉。そして、その言葉の意味をシュリア先

生は語り出した。

「模擬戦”ごとき”で手を抜くような奴は、実戦でも手を抜く。  
無意識のうちに”、な。それを防ぐためだ」

彼女の言葉を聞き、タクトは俯いた。――シユリア先生は間違ったことを言っていない。実戦で手を抜くというのは、すなわち死に値する。言葉通りそれを防ぐためなのだろう。

少しばかりジーンときたタクトは見少しばかり尊敬し、しかしシユリア先生は珍しく、悪戯っ子のような表情で、

「何、全力を出したら女装は勘弁してやる」

「その言葉、信じて良いんですね!!」

俯き加減だった顔を持ち上げ、タクトはシユリア先生に詰め寄った。女装――彼にとって、その言葉には多くのトラウマがある。

女っぽい。そんな理由で強制的に女装されたのは、未遂も含め、少なくとも三十回はあるのだから。

現金にもやる気を出したタクトに、シユリア先生は頷き、

「信じて良い、さ!」

「うあ!」

セリフの最後で彼女は手に持つ槍を横に薙ぐ。

その一撃をタクトは何とか避け、シユリア先生との距離を稼ぐ。

その動きを見て、シユリア先生はそのきれいな顔に凄惨な笑みを浮かべ、

「ほう、避けるか。中々やるじゃないか」

（もしかしてこの人、ただの戦闘狂!?!）

その凄惨な笑みを見て、タクトはふと思った。そう思わせるほどの  
凄みのある笑みだった。

女装の件も、模擬戦では全力を出せって言葉も、すべて本気でやら  
せるため！？

だとしたら汚い！ものすごく汚い！

少しばかりジーンとなった、先ほどの気持ちを返せ！

勝手にそう結論づけ、彼はクツと表情を引き締める。

「ふむ、流石に入試でやったやつだな」

そう言いつつも、未だ凄惨な笑みを浮かべているシュリア先生に憤  
りを感じつつ。

タクトは、左腰に白い小さな魔方陣を作り出した。

するとそこから、なんと刀の柄が現れた。

彼はいきなり現れた柄を右手で握るなり、それを魔方陣から引き抜  
く。

引き抜かれたそれは、日本刀――白銀に輝く刀身の刀。  
その刀をピツと構え、一つのことを思った。

（……なんでこうなったの？）

第6話 授業風景 ～模擬戦2～（前書き）

……すいません、またくだらんミスを…（題名忘れ）  
↑訂正済み

うつ、気をつけます…

## 第6話 授業風景 ～模擬戦2～

「さて、ルール説明だ。と言っても、ルールは簡単。相手に降参と言わせるか、コートの外に追い出せば良い」

そう言つて、シュリア先生は槍を構えた。

模擬戦開始、の前に二人はそれぞれの証に魔力を注ぎ込み、刃を潰す。このように、証は魔力を注ぎ込むと、ある程度の形を変える事が出来る。

刃引きを終えた事をお互いが確認すると。

「ー」先手は、シュリア先生がとった。

ダツと地面を駆け抜け、小手調べとばかりに槍が動き、低い位置からすくい上げるように振りきった。

タクトは、それをあつさりと防ぐ。

それを見たシュリア先生はほうつ、と感心する。

不意打ちの一撃をかわしたばかりか、今のも見事に防ぎきったのだ。表情に、自然と笑みが浮かぶ。

「やはり」

そう呟き、あつさりと防がれた槍を引き戻すなり、その場で回転。今度は逆方向から振り下ろす。

「っ…！」

突然、攻撃のベクトルが変わった事に驚き、タクトは驚愕の表情を浮かべる。

（早い…！）

「そこそこ出来るようだな！」

尤も、驚いたのはその速度だが。

襲い掛かる槍を、刀を振るいさばいた。それだけでなく、今度は逆襲とばかりに返す一撃を叩きこむ。

が、彼女は槍を振るいあつさりとそれを弾き、ニツと再度笑みを浮かたシュリア先生は槍を突き出す。

突き出された槍を、タクトは右に一步ズレることであっさりかわす。さらに彼は前へ踏み込み――。

「はあっ！」

短い掛け声とともに斜め上へ振り上げる。

「…残念だな」

しかし、その一太刀は、シュリア先生はただ呟きとともに振るわれた証――槍によって防がれる。

斜めに立てた槍の柄と鏑ぜり合いになり、タクトと拮抗する。

「くっ…！」

呻き声をあげて、タクトは腕に力を込め刀を押す。

しかし、シュリア先生はたいした力を込めたようには見えないのに、いくら押しても全く動じない。

そればかりか、これみよがしにうつすらと人をくつたような笑みを浮かべる。

それを見て、タクトは顔をしかめる。

このままではラチがあかない。

そう、このままでは！

「れいいんりゅう いちのたち 霊印流 壱之太刀ー」

突如、タクトが呟いた言葉。

それを聞いて、シュリア先生は驚愕した。

「お前、それは……っ！」

何か言いかけ、しかしすぐにあることを思い出す。

今日の前にいる彼、桐生タクトは”彼の従弟”なのだ、と言うことを。ならば、彼と同じ”剣術”を使っても、なんらおかしくはない。驚きに目を見張るシュリア先生をよそに、タクトの持つ刀の刀身が、半透明の何かー魔力で覆われる。そして彼はそのまま。

「そうま 爪魔”！」

刀を、押し切った。

押し切った刀は、そのままシュリア先生を吹き飛ばし。

「くっ……っ！」

彼女は、吹き飛ばされながらも槍を地面に突き刺し、そのままガリガリと土の地面を削ながらスピードを緩める。

後一歩分、と言うぎりぎりの所で、コートの外に追いやられる事を防いだ。

「……っ」

そのまま、顔をしかめながらシュリア先生はキッとタクトを睨む。

その視線を受け、しかし構わずタクトは追撃をかける。  
その、次の瞬間――。

タクトが一步踏み出した。それを見て、シュリア先生は目を見開く。

「しまっ……！」

彼女は、皆まで言うことが出来なかった。

霊印流 歩法、瞬歩――。

たった一步。そう、たった一步踏み出す。それだけで発動する、高速移動。

その速度は並ではなく――。

次の瞬間、タクトは彼女の目の前にいた。

つまり、目で追うことが出来ない。それほどのスピードを持って、タクトはシュリア先生の目の前に移動したのだ。

しかも彼は、移動中にやってのけたのか、”攻撃の予備動作”を終わらせていた。

それが何を意味するか――答えは、すぐに出た。

彼が現れる、と同時に。

タクトは刀を振るった。

シュリア先生は、タクトの一撃を受け止めた際、後一步でコート外に出てしまう所まで追いやられた。

もしここで、彼が先程放った爪魔なら、確実に追いやる事が出来たであろう。

しかし彼は――。

「――詰めが甘い」

”魔力を纏わせていない”――太刀を、彼女は難なく受け止め――。

「しまっ……！」

先程のお返しとばかりに、槍の一撃を喰らい彼は吹き飛んだ。

~~~~~

ふうつとため息をつき、彼女はタクトを吹き飛ばした方を見やる。そこには、大の字に倒れたタクトがいた。――苦しそうに胸を上下させている。

まあ、当然だ、と彼女は思った。何せ、お返しの一撃は彼の鳩尾にたたき込ませたのだから。それで動く奴はかなり頑丈である。

しかし、タクトはしばらく寝っ転がっていると、やがてその場で跳ね起き。地面に転がった証をひつつかみ、正面で構えた。

どうやら、見た目に反して頑丈な奴らしい。

そのことに、シュリアはふうつとため息をついた。

（まるで、あの人ね）

突如、彼女に宿る精霊が話しかけてきた。

（戦い方も、剣の太刀筋も、ほんとそっくり。そう思わない？）

（……たぶん、アイツとあの人から教わったんだろ。そうじゃないか、あの年でここまでやる説明がつかない）

シュリアはそう返して、手に持つ槍を右手でだらりと持つ。

そして、残った左手を前に突き出し、一言呟いた。

「…来る！」

タクトは刀を握る手にさらに力を込める。

シユリアの呟きに反応して、彼女の左の手のひらに赤い魔方陣が展開される。

何が来る、だ？ 彼女はタクトの言葉を聞いてそう思った。――何せ、これからやることは精霊使いにとっては、基本の戦い方なのだ。思わず首をかしげてしまったが、すぐに邪念を追い払い――。

「行け、炎竜^{えんりゆう}」

その魔方陣から炎が生まれ、その炎が竜の形状を型どり、タクトに向かって一直線に突き進む。

「て、炎竜！？」

タクトが驚きの声を上げるが、すぐにハッとして、その場で飛び上がることによってシユリアが放った炎竜をかわす。

しかし彼女はタクトの取った回避行動より、彼が驚きの声を上げた方に感心した。

（やはり、知っていたか）

（そりゃ、彼の従弟だもん。…たぶん、何度か喰らっていると思うよ）

彼女の精霊――スフィヤからの言葉に、シユリアは思わず頷きかけた。

それほど、彼の回避の仕方はうまかった。――かくゆう自分も数回喰らっているのだが。

その事実を思いだし、シユリアは顔をしかめる。

（手加減なしだったからな…）

その時の事を思いつつも、今は関係ないので放っておく。
炎竜をかわしたタクトは、重力に引かれて地面に着地する。
すると、彼はパツと地面を駆け出し、シュリアとの距離を詰める。
もちろん、瞬歩を発動させて。

「く…！」

突如目の前に現れたタクトを見て、シュリアは齒がみする。しかしこのスピードは、彼との模擬戦で何度も見ていた。故に、反応することは容易い。

槍を振るいタクトが放った刀を弾きー。

「はぁ！」

「っ！」

掛け声とともに返す一撃で再度タクトを吹き飛ばした。

「っの！」

吹き飛ばされつつも、何とか体勢を整え、足から着地する。
チラツと後ろを見る。

そこには、先程のシュリアと同じ、後一步と言うギリギリの状況が再現していた。

「くっ！」

うめき声を上げ、片足で一步踏み出そう前を向いてー。

竜の形をかたどった、炎の塊が目の前にあった。

驚愕に表情を固まらせー。

直後、炎の龍がタクトを飲み込んだ。

~~~~~

目を回して気絶したタクトを見て、シュリアはやれやれとため息をついた。ー実際、かなりまずい戦いになってしまったが、何とか教師の面目を保つことに成功した。

（相変わらずの、無茶する家族だな）

しかし内心の思いとは裏腹に、自然とその顔に笑みが浮かんでいく。

（やっぱり、あなたの従弟ですね）

心の中で、その”彼”に呼びかけた。

その後すぐに手をパンパンと叩き、今までの模擬戦を見て驚愕したままの生徒達に呼びかけた。

「さて、これで模擬戦は終了だ。……それから、女装の件だが……」

シュリアの言葉がそこに差し掛かったとき、周りの女子達が期待を込めた視線を送ってきた。

しかし、彼女はその視線を完全に無視し。

「本人が気絶したため、この件はなかったことに」

そう言うと、一部の女子達からブーイングの声が上がる。ーが、たったの一睨みでそれらすべてを黙らせた。

元々、シュリアとしては無理矢理女装させようなどとは少しも思ってもいない。

ただ、色々試した結果、こういうふうにしたら相手が全力を尽くしてくるので、自分としてはとてもやりやすいのだ。

コホンっと一つ咳払いをし、

「さて、今度はそれぞれ二人ずつになって模擬戦開始だ。私が最初に言ったルール、それさえ守ってくれたらあとは何をしてもいい」

そう言った後、残りの生徒達を見比べ、

「では、始め!」

鋭い声で、そう言い放った。

余談だが、タクトは心優しく、良心のある男子生徒数名に医療室にたたき込まれた。

第6話 授業風景 〓 模擬戦2〓 (後書き)

模擬戦2、終了です。

これの後は、解説等、ですね、今のところ。

ああ、めんどくさい)オイ

第6話 授業風景 ～講義～（前書き）

今回は一話にまとめました。

## 第6話 授業風景 ～講義～

フェルアント学園の一角にある教室。今そこでは術式の授業を行っていた。

「さて、まずは我々精霊使いが使う術式――コベラ式のおさらいをしよう」

そう言つて教壇に立つのは、四十代前半の中年教師――ジム先生だ。表情に常に優しい笑みが絶えない彼は、四十代にしては若干若く、生き生きと輝いている。――よほど、教師として何かを教えるのが好きなのだろう。

ちなみに、彼の頭は見事なまでにスキンヘッドであつた。――髪の毛が、みつともなく残っている感が全くないほど。それはともかく、ジム先生の講義を聞いているレナは精霊に語りかけた。

（ねえキャベラ。あれ……）

（うん。寝てるわね）

キャベラと呼ばれた精霊は、彼女の言葉に頷いた。

そう言つて視線を向けるのは、自分の幼なじみの一人である宮藤マモルだった。――偶然にも、自分と同じ時間帯の授業を選んだらしい。

その彼は今、机の上で爆睡していた。

彼の様子に、レナははあつとため息をついた。

（なにやっているんだろう、あれは）

（寝るんなら部屋で寝なさいよ……）

二人そろってマモルに苦言を漏らす。

当然、その苦言が彼に届くはずもなく。――彼は現在進行形で爆睡していた。

その様子を見たジム先生が、その笑顔を絶やすことなく歩き出し。

「コベラ式だが、それには大まかに分けて四つに分けられる。さて、宮藤君」

スタスタと歩いた行き先は、マモルの席。そこには当然、爆睡中の彼がいる。

ジム先生は一度、彼の肩を揺すり、それでも起きないことを確かめた。

すると次の瞬間、マモルの頭に出席簿がたたきつけられた。

「~~~~っ！」

見た目の割に結構痛かったのか、頭を押さえて彼は悶絶。――見た目と違って結構実力行使なんだ、とその光景を見てレナは思った。

「さて、宮藤君」

「……はい」

頭をさすり続けるマモルに、ジム先生は口調を強めて再度尋ねた。

「コベラ式には大きく分けて三つある。その内の一つは？」

「……属性変化術、です」

消え入りそうなほどの小声でマモルは答えた。

（ていうか、まだ痛いのか？）

消え入りそうなほどの声を聞き、未だ痛そうにしているマモルを見てレナはそう思った。

一方ジム先生は、マモルの答えを聞いて頷いた。

「そうだね。皆さんがよく使うであろう術式だね。――宮藤君、授業中の睡眠は減点だよ」

みんなにそう言った後、マモル個人に釘を刺しておく。――第一印象と違って、厳しいところもあるようだ。

マモルが小さく頭を下げるのを見ると、その顔に笑みを浮かべる。そして、その笑顔のまま彼は続けた。

「属性変化術の特徴は何かかな？」

そうみんなに呼びかけると、一人の男子が答えた。

「属性変化術の特徴は、魔力を別の物質に変えることです」

「うん、そうだね。ありがとう、ファールド君」

そう言うと、ファールドと呼ばれた生徒はにやりと感じ悪く微笑んだ。

透き通るような色合いの金髪に、同じく金の瞳。顔立ちも整っている。しかしそのせいか、感じの悪さがひどく目立った。

……関わり合いになりたくない。

レナは即座にそう思った。

ジム先生もそう思ったのか、表情に苦笑いを浮かべた。

「ファールド君が言ったとおり、魔力を別の物質――つまり火、水、

雷、風、土の五つに変換することが出来る。それが属性変化術だね」

そう言うなり、教壇にある黒板に図を書き入れていく。

最初に円を描き、そこから3本の線を引く。3本の線の先にそれぞれ円を描くと、その中の一つに”属性変化”と書き入れた。

そして、さらに”属性変化”と書かれた円に5本、新たに線を引く。先程と同じ要領でその線に円を書き足した。

その円の中にそれぞれ火、水、雷、風、土と書く。

「属性変化。それがなぜ、戦闘でよく用いられるのか。……では鈴野さん、わかるかね？」

解説をしながら振り向き、少しばかり教室を見渡してレナを当てた。

（あ、あたし？）

（がんばって、レナ）

当てられたレナは、オドオドしつつもジム先生の問いかけに答えた。

「えっと、呪文<sup>ルーン</sup>の詠唱が短い上に簡単だから、ですか？」

「そう、そのとおり」

レナの回答に満足したのか、笑顔を浮かべたまま彼は頷いた。

「属性変化は呪文<sup>ルーン</sup>の詠唱が短い。それこそ、一言で終わるくらいにね。彼女が言ってくれたとおりだ。そして、属性変化の呪文は”五つしかない”。これがどう言うことかわかるかね？」

「術の数が5種類しかない。つまり火、水、雷、風、土しかないってこと。……です」

ジム先生の質問に、机に片肘をついたまま、ため口でマモルは答えた。――が、最後に思い出したかのように”です”を付け加える。その辺が、いかにも彼らしかった。

ジム先生はそのことは気にもとめないのか、全く触れないまま頷いた。

「そうだね。今はまだこの5種類しか見つかってないんだ」

図に書き入れた五つの円を指さしながら彼は答えた。

「今後新たな属性変化が見つかるかもしれない。そのことを頭に入れとくと良いね」

そう言っていると、先生は黒板から目を離し、クラスのみんなを見渡した。

「先程、鈴野さんが”詠唱が短い”と言ってくれたけども、”簡単”とも言ったよね。その意味……」

先生はそう言っていると、右の手を開き、さらに一言呟いた。すると、手のひらから赤い魔方陣が展開される。

展開された魔方陣が煌めきつつ、その中心部分に炎が現れる。――いや、正確には”火”か。マッチサイズの火が現れる。

現れた火をそのままに、ジム先生はその顔に笑みを浮かべる。

「――それは、術者の魔力に。”イメージ”に。その威力を、そして”形状”を変える」

彼はそう言った。

つまり、属性変化によって生み出された物。それに魔力を注ぎ込むと量が、質が、上がり。イメージによって、その形を変える。

戦闘でよく用いられるのは、そう言った性質があるからだ。――とてつもないほど便利なため。

使いようによつては、炎の竜を生み出したり、雷の鳥を放つたりできる。さらには範囲――量も、そして威力――質も。術者の魔力量によつて、変化するのだ。

極端な話、同じ形状をかたどつても、術者の”差”によつては範囲も威力も桁が違う、なんてことにもなりかねない。

故に、属性変化は術者の力量を表すのだ。

ジム先生が発生させた火は、彼が魔力を注ぎ込むと大きくなつていった。マッチサイズから、手のひらサイズ――小さなボール並みの大きさに。

すつと手を握ると、それだけで魔方陣が消え、同時に炎も消えた。

「これがコベラ式に使われる魔術の一つ。なら……」

そう言つて、今度は先程書いた図の、空欄の円二つを指さして尋ねた。

「あと二つは何かな？」

「詠唱魔術と精霊魔術です」

ジム先生の問いかけに、間髪入れずにフィールドと呼ばれた少年が答えた。――はあつとため息をつきつつ。

その様子に、レナは眉をひそめた。言うなれば若干むかついた。

何せ彼の様子が、こんな授業には付き合つていられない、そんな見下すような感じだったのだから。

彼女自身、上から目線の人は大っ嫌いである。

その様子には気づいていないのか、先生は微笑みを浮かべたまま、

「そう、その二つだ」

黒板の空欄の円に、その二つの言葉を書き入れた。  
書き入れると、二つの内の一つ、詠唱魔術のほうを指さしながら説明を始めた。

「では、詠唱魔術の方を。詠唱魔術は、文字道り呪文ルインを唱えて発動する。だが、属性変化と違うのは、その呪文が長いと言うこと。しかし、呪文が長いと言う欠点はあるものの、効力は絶大な物が多い」

再びクラス中を見渡しながら、ジム先生は穏やかに話しかけた。

「こちらは、属性変化とは違って呪文の種類が多い。しかも長いと言うこともあって、すべて覚えるのは困難だろう。……たまにその困難を平然とこなす人もいるけどね」

最後は自嘲的に、呆れたふうに笑いながら言っていた。――その困難を平然とこなす人を、レナは知っているが。

つられてレナも引きつった愛想笑い浮かべながら、先生の解説を聞いていた。

「詠唱系は、種類が豊富だから割合するよ。時間があつたらその内にね。――さて、残りの1個だ」

黒板に書かれ、未だ説明を受けていない一つの術――精霊魔術を指し示した。

「この精霊魔術、別名がある。それは、何かな？」

――クラス内が、騒然となった。どうやら皆、その別名を知らないらしい。

「何それ、別名つてあるの？」

と、半信半疑の者や、

「なあ、知ってる？」

一人言ーおそらく精霊に聞いているのであろうーをしている者。

「……全く知りません」

あきらめている者など、反応は様々であった。

ちなみに、レナはその反応を見て、クスリと笑い、マモルはニヤニヤと笑っていた。

この反応はある意味当然である。

皆が知らないと騒いでいる別名ーそれを知っているのだから。

レナはともかく（皆の様子を見て、微笑ましい気分になった）、マモルは完全に優越感に浸っている。そんなマモルの様子を見たのか、ファールドが彼のことを一方的に睨んでいた。ー彼も知らない内の一人なのだろう。

二人が（正確には一人だが）険悪な雰囲気になっているとはつゆ知らずにジム先生は続けた。

「ふむ、知らないのか。まあ仕方がない、これは私もつい最近知ったことだ」

彼はそこで一拍おき、

「”召喚術”と呼ばれている」

精霊魔術の別名――召喚術。

それを聞いて一同首をかしげるも、すぐに納得したように頷いた。それ（精霊魔術）は、確かに召喚と呼んでもおかしくはない。実際に、精霊を召喚するのだから。

言えて妙なり、とはこのこととばかりにクラスの皆が晴れやかな表情を浮かべた。

「それは精霊を呼び出す……召喚したり、証を召喚したりと、何かとよく使う魔術でもあるね」

ジム先生はその反応を見た後、解説を続けた。

「この魔術の最大の利点は、呪文の詠唱がないことだ。――だからこそ、精霊使いで一番初めに使う術として知られている。……そう言えば、証についてが残っていたね」

黒板に書かれている精霊魔術の所に、先程と同じ過程で付け足していく。それと同時に、証の説明を簡単に始めた。

その様子を見ながら、しかしレナは証のことを独自に考えていた。証というのは、彼女らの世界ではおとぎ話と”信じられている”魔法使い、その杖的な存在であった。

実際には、証がなくとも魔術の行使は出来るのだが。だが、考え方はそれに近い。

ちなみに、彼女らの出身世界である地球では、魔力や魔術、精霊などは一般的には知られていない。

話を戻すが、証とは杖的な存在である。ならばなぜ、”形状が杖でないのか”。

それは――

（本人の潜在能力……主に戦い方によって、その形状を変える……

だっけ？)

(そう、そのとおり。)

――つまり、そういうことである。

レナが証についての詳細を思い出し、キャベラに確認を取った。――キャベラは、なぜか音符マークを付け、いかにも上機嫌そうに言った。

「これで、コベラ式のおさらいは一通りやったね」

どうやら説明は終わったらしい。おさらいの終わりを告げ、ジム先生は微笑んだ。

考え事をしていたレナは、その声にハッと我に返った。同時、壁に取り付けられた時計に目をやり、講義が終わるまで若干時間が残っていることを確認した。

先生はうむつと頷くと、

「それではこれから、魔術の応用をやってみようか」

――本日は、説明ばかりの講義となった。

第6話 授業風景 〱 講義 〱 (後書き)

授業風景終了です。

次は…なんだろう？ (汗

**第7話 自由人は走らせたら危険である（前書き）**

タイトル、すさまじく変ですがお気になさらずw

## 第7話 自由人は走らせたら危険である

ところ変わって昼時。当然、昼食を取る時間帯である。

ここ、フェルアント学園には様々な世界の料理がある。流石は、世界をまたぐ組織つと言ったところか。

とはいえ、実を言うと、それほど多くの世界から人が来ているわけではない。

その一つが、異世界を見つけていない、と言うこと。そして、もう一つが、精霊のことを知らない世界である、と言うこと。

異世界と言っても、現在フェルアントと同盟を組んでいる世界は二桁もないだろう。それぐらいの少なさであり、また、せつかく見つけても精霊のことを知らない、と言うこともあり、せつかくの苦勞が水の泡である。

そう言う異世界のことは、たとえ見つけても干渉しないことと、フェルアントでは取り決めおり、そのため、数には含んでいない。その異世界も含めれば三、四十はあるらしい。

唯一の例外は、地球ぐらいであろう。そのおかげで、案外フェルアントでは有名である。

その有名である地球出身の、医療室にたたき込まれた精霊使いは――  
！。

「いつつ……」

顔をしかめながら、学園の廊下をのろのろと歩いていた。

手の甲で腰をトントンとたたいており、そのさまはどこにでもいる老人のそれであった。

ともかくタクトは、さっさと昼食をとろうとフェルアント学園の廊下を歩き続け。

「それでさうって、大丈夫？」

「…いや、うん……大丈夫……っ……だと思っ」

すぐ隣を歩いている少女ーコルダ・モランと名乗る少女は、タクトの漏らした声を聞いて、心配したふうに見えた。

肌の色は日に焼けたのか、元からそうなのか、若干黒ずんでおり、紫色の髪の毛をツインテールにまとめている。

彼は、最初は大丈夫と言ったが、すぐさま走った痛みにつめき声を上げた。

ははーっとコルダは笑い声を上げ、タクトに触れた。

突然のことに思わず驚いた表情のタクトを尻目に、彼女はニコニコと笑ったまま、

「痛いの痛いの飛んでけ」

「……どこで覚えたのそれ？」

触れたところをさすりながら、パツとあらぬ方向に何かを飛ばす仕草をする彼女に、タクトはしかめっ面で問いかけた。

……その、ひどく懐かしいフレーズについて。すると彼女はキョトンとした顔で、

「え……。今即席で作ったんだけど？」

「……………」

答えを聞き、タクトはキョトンとした。

（へ？ たった今作ったって？）

（ある意味、恐ろしいな……）

コウの言うとうり、ある意味恐ろしい。タクトは額を抱え、はあー

つとため息をつき、

「その歌は、僕の故郷の歌でね」

「ねえー、早く食堂行こうー？」

「つて、聞いてないし！」

せつかく説明しようとしても、聞く耳持たず、それどころかいきなり会話の内容が変わり、食堂へと促す彼女に、タクトはひどく憤慨した。ーコルダ、かなりの自由人である。

だが、彼の叫びを聞いても、コルダは「行こうー」と言うだけだった。そんな彼女を見て、なんだか説明す気も失せた。

(……なんでこんな人と出会ったんだろう)

タクトはこの日の運の悪さを実感した。朝っぱらからシュリア先生に気絶させられ(おかげで女装は免れたが)、医療室から出てきたと思えば偶然コルダとばったり出会い。

良いことないかな、等と再度ため息をつき、タクトは彼女に引きずられるようにして食堂に向かっていった。

~~~~~

マモルとレナは、うんざりしながら目の前の人物の話を聞いていた。その人物、アイギット・スチム・ファールド等という大層な名前を持つ人物の話は、聞いていてイライラしてきた。

「田舎モンはさっさと帰れ。ここは俺達の世界だぜ」

「あー、はいはいそーですか」

アイギットの辛辣な言葉を、あくまでも涼しい表情で聞き流しながら

ら、マモル達は食堂で昼食を食べ始める。とはいえ、このアイギツトとやら、取播きが大勢いるようで、二人はそれらに囲まれながら食事をしていた。

ことの始まりは、ごくごく簡単なことだった。機嫌が悪いアイギツトとマモルの肩がぶつかった。当然マモルは謝罪したが、なぜか相手が食ってかかってきたのだ。

それはどうでも良いのだが、その間に挟まれているレナは気まずいことこの上ない。うつと内心半泣きの状態で彼女は出されたパンを一口かじる。が、全く味を感じない。

マモルの言葉に反感を覚えたのか、アイギツトは眉根を寄せ、彼にしては低い声で脅すようにささやく。

「……どうやら言葉が通じないらしいな。そこまで馬鹿なら仕方ないな。何せ、入学の時遅れかけたくらいだもんな」

「ほう……」

人を馬鹿にした内容に、マモルの眼に雷光が走った。

慌ててレナが止めようとしたが間に合わず、口の端をゆがめながらゆらりと立ち上がったマモルは、アイギツトと真つ正面からにらみ合う。

「へー、猿山のでっぺんにいる大将も、ずいぶんと進化したんだな」
「……どう言う意味だ」

顔をしかめたアイギツトを見て、マモルはその表情に笑みを浮かべた。

「へ、進化という言葉の意味を知らないみたいだな。それじゃあ、俺達のことを馬鹿と言う資格はないね」

彼と同じ、人を見下した口調でいうマモルに、アイギットはその顔に怒りをあらわにさせる。もう止められないと悟ったのか、レナは大きくため息をつきつつパンをかじる。何でこう、彼は屁理屈がうまいのか。それも、人を怒らすような。

彼とは腐れ縁であり、そのため毎回とばっちりを受けていたもう一人の幼なじみの気持ちを存分に理解した。

ともあれ、二人を囲っていた取播きは、リーダーであるアイギットの怒りを見て、自らも詰め寄るように一歩近づいてきた。怒りを押し殺したのが丸わかりの声音で、

「し、進化という言葉なら知っているさもちろん。だが、俺が聞きたいのは」

「なら、猿山か？それはもちろん、お前らみたいな奴のことを言うんだよ」

……逃げようかな、等とレナはその啖呵を聞いて即座に思った。

当然、その言葉を聞き、アイギット達がその顔を醜く歪ませていく。

（ねえキャベラ。ここで逃げても罰あたらないよね？）

（当たるわけないでしょ。むしろここにいたらとばっちりをくらうわよ）

その様子を見たレナは、同じことを思った、ため息混じりのキャベラにうんと頷き、即座に立ち上がってその場を後にしようとする。

「おい、お前。何処に行く？」

「ひゃあ！」

神様は何処までも優しくなかった。取播きが、立ち上がり逃げようとしていたレナをつかみ、強引に顔を振り向かのだ。当然、その様

子はマモルとアイギットにも見られており、若干慌てたマモルを見て、アイギットはふっと笑った。

「どうやら、君の友達はずいぶん薄情みたいだね。君のことをあっさり見放そうとしていたよ」

「……………」

苦虫を潰したような表情でマモルはその様子を見ていた。

「う、ごめんなさい…」

取播きから何とか離れ、マモルの側まで来ると、レナは頭を下げてきた。と言っても、彼自身逃げたことに対しては何とも思っていないのだが。

特に気にしていない、と言うふうに頷くと、やっと彼女は顔を上げた。

と、そこでー。

「やっぱり今日は厄日だ……。帰って寝ようかな」

突然響いたその声に、そこにいた者すべてが一斉にそちらを向いた。セミロングの黒髪にやや低い身長。そして中性的な顔立ちをしており、長い髪とあわせて少女と間違えそうな印象を出している。フェルアント学園の男子制服が、彼を男と表す数少ない物であった。

そして、彼と連れ立っている少女ーやや浅黒い肌に紫色の髪の毛をツインテールにしてまとめたその人は、何がうれしいのかニコニコ顔である。

その二人ータクトとコルダは両手にお盆を持っていて、その上に食事がのってあった。これから昼食なのだろう。タクトは、目の前の一触即発の状態を見ながら深いため息を漏らした。

「騒ぐのは自由だけどさ、このままだと食事の時間が終わっちゃうから、また後にしたらどう?」

そのタクトの提案に苦々しい表情を浮かべたままアイギットが、

「……わかった」

一つ頷くと、踵を返してどこかに向かい、その後を取播き連中がタクト達を睨みながら追っていく。

その様子を目で追いながら、タクトはマモルとレナの二人に問いかけた。

「何があつたのさ」

「……まあ、色々」

深呼吸してこみ上げていた物をはき出すと、マモルはドカッと手短にある椅子に座った。

タクトもその隣に座り、続いてレナやコルダが一緒になって座る。

「ねえ、名前なんて言うの?」

唐突にコルダが聞いてきた。あまりにも唐突だったが、自己紹介なら良いか、と二人は思い苦笑気味に笑った。

「私は鈴野レナ。よろしくね」

「俺は宮藤——」

「でさ、一体何があつたの?」

いきなり話が変わったことに（それと自分の自己紹介がスルーされ

たことに）驚き、マモルは呆然とした表情を浮かべた。

（あれ…俺、まだ自己紹介…）

声に出さずにそう思う。隣のタクトを見ると、

「こういう奴だから」

と、端的に言われた。無論、それで納得出来るはずもない。ちょうどそこでは、レナがコルダに今までのいきさつを話している途中のようで、ふむふむといった感じで頷いている。

「ーと言っ訳なんです」

「なるほど…。うんうんわかった、要するにアイツの心が狭くて、フジの方も意固地になりすぎた、と言っことでしょう?。」

「まあ、そうだね」

そう言って、彼女の要約に苦笑するタクト。だが、核心は突いている。

アイギットの方も意地を張りすぎだな、と思う一方で、マモルももう少し言い方を変えられないのか、とも思う。

今度は注意しろよ、と言っふうに隣のマモルを見たが、彼は顔をしかめてコルダの方を睨んでいる。

「……おい、フジってのは俺か?」

「そうだよ」

のほほんとした表情でマモルの問いに答えるコルダ。

「俺は宮藤だっ！宮藤マモル！」

テーブルをバンツと叩きつけ、勢いのままに立ち上がる。マモルの行動に、タクトとレナはビクツと肩をふるわした。だが、彼女のそれからの反応は予想の範疇を超えていた。

ビククリしたふうでもなく、かといって驚いた様子も見せないまま――どちらかというと、キョトンとした表情で、

「…え？ミヤが名字で、フジが名前じゃないの？」

「……………」

コルダの表情には、一点の曇りのない、実に見事な啞然とした物を浮かべていた。

その顔を見て、三人はため息を漏らした。

「もういい。怒る気も失せた。……とりあえず、人の話は最後まで聞こうな」

すごく疲れた表情のまま、マモルは椅子に深く腰掛けた。

第8話 授業風景午後の部々守るべきもの（前書き）

第8話です!!

タイトルからして重そう……。でもそんなでもない（笑

第8話 授業風景午後の部 守るべきもの

昼食を終えると、再びそれぞれの授業へ向かっていった。

タクトが向かっていった授業は魔力講義。どうやらレナとコルダも同じようで、先の流れから必然的に一緒になっていた。

ちなみにレナとコルダの二人は早々と友達になっているようで、先程から仲良く談笑している。

しかし、隣で聞いていると、レナがコルダの話の移り変わりの早さに四苦八苦しているみたいだった。

助けを求めるかのように、ちらりとこちらを見てくるレナの視線に苦笑しながら、会話の中に入っていく。

「そう言えば、コルダは何処の世界出身なの？」

「あたしはこの世界出身だよ。と言っても、めちやくちゃ田舎だったから、フェルアントの案内とかは出来ない。ていうか、案内してほしいよ」

朗らかに笑うコルダに、それ僕達もだから、とタクトが笑いながら言った。

「それにしても、アンタ……」

「何？」

教室が見えてきたところまで来ると、じっと見つめてくるコルダの視線に気づき、タクトは首を傾げつつ問いかける。その様子を見た彼女は、まるで悪戯っ子みたくニヤツと笑った。

「アンタ、女の子っぽいね」

「……………」

またそれが、と言う思いで盛大にため息をつく。彼女はそれに構わず、

「後でさあ、あたしの部屋に来ない？そこでちょっと着せ替……もとい、良い服あげるよ？」

「いらないよ！？と言うか今、着せ替えていおうとしてたよね！？」

そんな良い服いらないよ、とタクトは叫ぶ。しかし、なおもニヤニヤする彼女の表情を見て、彼の直感が危険だと告げる。隣にいるレナに今度はこちらから、視線で助けを求める。目が合い、彼女は頷いた。

それを見て、ホッと胸をなで下ろす。ああ、やっぱりレナは優しいな、と。

「コルダ、もしやるんだったら私も良いかな？」

「おー、良いーよっ」

……前言撤回しよう、彼女は優しくなかった。

ノリノリな二人に、彼は釘を刺す。

「二人とも何言ってるのさ！？僕はやらないからね！？」

『えっ』

「えっじゃないよ！ーやらないって言ったらやらないよ！ー」

なぜかハモった二人に、タクトは全力で否定した。

~~~~~

今回の授業、魔力講義。魔力は魔術においてはとても基本的かつ重要な役割を果たしている。

術を使うときに使用するエネルギー、それが魔力である。

よって、魔力がなければ術を使うことは出来ない。ならばこの魔力、一体どこから生まれるのか。

人は、精霊と契約を結び、精霊使いとなるとき、その精霊から与えられる物がある。

一つは人の細胞の活性化、つまり新陳代謝の増加だ。これにより、精霊使いは常人とは比べものにならないくらいの高い身体能力をしている。

そして、もう一つ。

”魔力炉”<sup>まりよくろ</sup>と呼ばれる機関を与えられる。

この魔力炉。与えられると人の体と結合し、体内で魔力を生成し続ける、いわば永久機関である。

元々は精霊が持っている物なのだが、それを分け与えられるのだ。当然、個人によって一度に生成できる量には限りがあるが。

そのことを魔力講義担当の先生、アニユレイトと名乗る先生が教えていた。

「と、言うわけだ。故に、この魔力は精霊からの贈り物であり、我々選ばれた者のみが扱える力！」

力強く言い切った後、最後に解説を付け加えた。

「しかし、選ばれたからといってむやみに振るっていい力ではない。……専門外だが、フェルアントが定めた規律にはこうある」

専門外と言いつつも、その規律とやらを空で語り出した。

『魔力は我々精霊使いに与えられた物であり、同時、本来すべての者に分け与えられる物である。よって、世の精霊使いはこれをそのために使用し、悪用することを認めない』

世の中、不平等な事柄が数多くある。精霊を宿し、精霊使いとなつた者もまたしかりである。ならば精霊使いは、直接的に、間接的に、そうではない一般人のために魔力を、魔術を使う。

この規律は、そのことを言っているのである。

見た目は悪そうな風貌をしているアニユレイト教授（先生よりもこちらの方がしつくり来る）だが、案外いい人なのだろう。説明している最中もおもしろいことを言っていた教授だが、このときばかりは真剣な眼差しをしていた。

「いいか、この規律はシュリアの嬢ちゃんふうに言くと、”絶対に守らなくてはいけない規律”だ。……まあ、俺達教師陣を敵に回したいのなら、話は別だが？」

言葉の前半部分、恐れ多い（一部にとっては比喻にあらず）シュリア先生を嬢ちゃん呼ばわり。肝っ玉が据わっている面を見せたかと思うと、ニヤツと笑いつつ念を押す。

と言つても、たかが一年生に教師陣を倒せるとは思わないのでクラス全員は首を縦に振っていた。

ちなみにこの後、教授の雑談にて授業が終了した。

本人曰く、「元から今日はやることねえし。さあ、ここからは先生との楽しい雑談タイムと行こう！」と言つて、笑顔で机に両手を叩きつけた。

内容は、とても楽しい物であつた。時折、コルダが話の腰を折つたり、男子生徒が自ら墓穴を掘つた発言をしたり等。

これにて本日の授業終了。フェルアント学園は、今日も平和だった。

## 第9話 波乱 Ⅰ

「ふうー、終わった終わった」

授業終了後、あちろこちらから似たような台詞が聞こえて来る。

入学式を終えてからの最初の日の授業はすべて終わり、タクトは荷物を戻すため一度部屋に戻ることにした。

教室を出ようとドアまで行くと、不意に後ろから声をかけられた。そちらを振り向くと、レナとコルダの二人がいた。

「ねえタクト。このあと暇？」

「んー。そうだね、荷物置いたら暇かな」

「あ、じゃあさ。夕食までまだ時間もあるし、荷物置いたら校内まわってみない？」

レナのその提案にタクトは了承した。事実、荷物を置いた後何も無い上、あの狭い部屋にいる気もない。

そう言う形で、タクトを含めた三人は校内探検をすることとなった。

部屋に戻り荷物を置くと、いきなり魔法陣が展開、そこからタクトの精霊であるコウが現れた。

すぐに彼の定位置であるタクトの左肩に止まると、そのまま彼に話しかけた。

「このあと、二人と校内回るのか？」

「そうだね、暇潰しもかねて」

コウの問いに答えながら部屋を出る。

授業が終わると、後は自由時間のようなもので、別に私服に着替えても良いことになっている。とは言え、これから学園に戻るの  
で、今のタクトは制服を着用している。

ただ単に着替えるのが面倒、と言うのもあるのだが。

余談だが、制服の改造も認められている。ホントに自由度が高い。  
それはともかく、タクトの答えを聞いたコウは、ニヤリと笑った。

「なるほど、女子二人と。良いねえ、両手に花だな」

そう言ったコウを呆れた目で見やり、タクトはフンと鼻をならす。

「そんなわけない。ただ成り行きだよ」

「いやいや、周りから見ればうらやましい限りだぞ。二人とも結構  
見られる顔してるし」

「ありがとう、コウ」

いきなりの第三者の声に、タクトとコウは驚きを浮かべてそちらを  
見た。そこには、褒められたせいか若干顔を赤くたレナとコルダの  
二人が立っていた。女性の身支度は長い、とよく言うが、二人はか  
なり早い。制服から着替えてないところを見ると、荷物だけを置い  
てきたようなので当然と言えば当然か。

レナの言葉の後、一同沈黙してしまい、そのことでタクトは気まず  
さを覚え、とりあえず謝罪する。

「あー…その、ごめん。うちのコウが」

「タクトは何も言っていないから別に気にしてないよ。…まあ、褒め  
られたのはうれしいけど」

「そ、そうだね。コウ、良い奴だ」

コルダがニツコリと笑みを浮かべ、コウに感謝すると、

「うん、良い奴だな、お前。どこぞの馬鹿とは大違いだ」

「……その大馬鹿って誰？」

タクトの問いかけには答えず、コウは二人を促す。

「それよりも、そろそろ行かないか？」

「そうだね。じゃあ行こつか」

そう言うなり、そそくさと二人とともに進み始めるコウ。その後ろ姿を見ながら、タクトは納得出来ない思いで息を吐いた。

~~~~~

「また会ったな」

「……」

授業が終わり、マモルはタクトとレナを探しに行こうかなと思い立った矢先、いきなり声をかけられた。

そちらを振り向くと、そこにはいつぞやのアイギットでいる。彼は後ろに取播きを侍らせ、学園の廊下をゆつくりと歩いていた。

後ろにいる取播きが横並びになって進んでおり、大変通行の邪魔になっていた。その様子に、同学年の連中はおるか、先輩達までもがうつとひるみ、そそくさと脇に寄っていく。

取播き連中がすごい形相で睨み、だらしなく歩く姿を見て、マモルは人知れず息を吐く。

（まったく、人騒がせな連中だ）

（お前も災難だな。こんな連中に目をつけられるなんてな）

ほんと、全くだー内心で精霊に語りかけながら、そつと周りに目をやる。別に助けを求めているからではない。先輩達でさえよけて通っている、その気迫に飲まれ、助けようと動く奴は皆無なのだ。正直な話、見た目の威圧感がハンパなく高いのだ。

今自分たちがいるところは校庭の広場の一角であり、寮に戻るための近道でもある。だからこそ、それなりに人が通っている。視界は開けており、逃げたとたん即座にばれて捕まるだろう。

どうやって逃げようか迷っていると、向こうからやって来た一団がマモルを取り囲んだ。

（四方八方塞がれたな）

（ふむ……）

マモルの問いかけに相づちをうつ精霊ガル。ガルはガルと思うところがあるのかもしれないが、マモルはその様子に若干呆れた。

（よくこんな時に落ち着いていられるな…）

（こついう時だからこそ、落ち着かないとな。……ていうか）

お前こそ落ち着いてるじゃないか。ガルのその言葉に何も返さず、相手ー特にアイギットから目を離さずにマモルはそつと手を後ろにやる。こちらから襲う気はないが、向こうが襲ってきた時に備えて、いつでも自身の証を取り出せるようにしておく。

自分はどこぞの馬鹿とは違って、詰めは甘くないと自負している。

「おう、誰かと思ったら、取播き連中がいないと何も出来ないアイギット君じゃないですか。どうしたんだい、こんなところに」

内心の思いをすべて押さえ込み、マモルはあくまで軽い口調で彼にそう答える。

やはりというか、その返答を聞いて一番に反応したのは取播きだった。物を言わずにこちらに詰め寄ると、すぐさま事に及ぶつもりなのか腰に手をやる。だが、

「待て！　ここでやったらまずい」

手を上げ、取播きを押さえ込むと、今度は底冷のする眼差しを向けた。すぐに消えたが、口元に狂気じみた笑みを浮かべたのを、マモルは見逃さなかった。

「宮藤……と言ったかな？　ここではちょっと話しづらい。別の場所に行かないか？」

彼の提案、それが何を意味するのかわからないほどマモルは無知ではなかった。――それがただ単の話ではないことに。

故に従いたくはなかったが、このままここでその”話し”とやらを聞くと、周りにまで迷惑をかけるかもしれない。その思いで、彼は首を縦に振った。

第9話 波乱 Ⅱ

アイギット達は不運な目に遭った。

精霊使い達にはそれぞれランクがある。とは言え、ランクが高いからと言って偉いわけではない。ただ単の強さ順であり、それが高いほど強いと言うだけである。

また、コベラ式の特性上外見からは強さなど推し量ることは出来ない。また、マモル”達”が精霊達の事を知らない無知なる世界から来たこともある。従って、彼らにランクがあつたとしてもそれは第十位（最低位）あたりだろうと。

その油断が、彼らに自信を与えてしまった。

取播きに起こった不運は、文字通り運がなかった。それだけでしかない。

「終了、っと」

半日前にタクトがシュリアとの模擬戦を繰り広げた第二アリーナ内。マモルの口調は軽く、簡単な用事が終わったとも言つふうに、両手に持ったゴツイ二丁銃――証を指先でくると回す。すばらしいまでの余裕ぶりで、――一歩も動かなければ、余裕にもなる――息すら乱していない。

その傍らで、刀を肩に担ぎながらタクトはふうつとため息をついた。彼らの周りには、倒れうめき声を上げる取り巻き達。数名気絶している者もいるが命には別状はない。一通り見て、もう立ち向かってくる奴らがいないことを確認するとタクトは振り返った。

「マモル、大丈夫？」

「そついうお前こそ……って……。大丈夫か、お前だし」

「いや、僕だからってどう言う意味？」

思わずジト目でマモルを睨むが、それには答えず、アイギットに右手の銃を突きつけた。

「チエックメイトだ」

無表情に銃口を見つめるアイギットに勝利宣言を下した。

~~~~~

時を少し遡る。

マモルがアイギット達に連れ去った直後、その校庭に和気藹々としたタクト達三人の姿が現れた。もともと、和気藹々としているのはレナとコルダの二人だけで、タクトはたまに会話に参加するだけである。

タクトとしても会話には積極的に参加しようと試みているのだが、女子二人の会話について行くのには彼には重すぎる試練であった。そのため、二人の会話に耳を傾けながらも、暇つぶしに周囲を見渡していたりする。……どうも周りの雰囲気が悪い気がしてならない。その時だった。数名の男子達に連れさらわれるマモルを見つけたのは。

（あれって……）

よく見ると、連れ去っていく数名は見覚えがあった。確か、昼食時にマモルにいちやもんをつけていたグループではなかったか。そして、彼らが向かっていく方向。あそこは確か――

「……タクト？」

マモルを連れてどこかに行こうとする彼らを目で追い、なおもしばらく立ち止まった彼に気づいたレナが、どうかしたのかと言うふうに声をかけてきた。

「……ごめん、用事を思い出した。ちょっと先行ってて」

ただ事ではないと直感が感じ取り、レナ達にそうごまかし、先に行くよう促す。

しかし、相手も伊達に幼なじみをやっていない。彼の様子から何かを感じ取り、その用事がなんなのか尋ねてみた。こう切り替えされるとは思わなかったタクトは目に見えてたじろいだ。内心であー、やら、うー、やら唸る。実は彼、こう言うアドリブが大の苦手なのだ。

面識のない初対面の人でさえあっけなく見透かされる。レナはともかく、コルダにも感づかれるだろう。

どうやってこの状況から逃げようか迷っていると、彼女らの後ろからとある人が通り過ぎた。その人はこの状況から逃げるのにつけての人物だった。

「お前達、何をやっている」

後ろから突然現れた人物――シュリア先生は、二人を見下ろす形で現れた。

「し、シュリア先生!？」

レナとコルダは振り向き、いきなり現れた彼女の威圧感に押され、半ば言い訳みたく播くして立てる。

「そ、その、たく……じゃないや、桐生君が何か隠しているみたいで

……」

「…その桐生だが、いないぞ」

『えっ！？』

彼女の指摘に我に返った二人が振り向くと、そこには誰もいない。先程までいたタクトが、きれいさっぱりと消えていた。それに気づいた二人は、あたふたとあたりを見渡す。

「ええっ、何処行つたの？」

若干声を荒げてコルダはキョロキョロと見渡した。

いきなり消えた。高速移動でどこかに逃げたか、透明化の術を使つたか。だが、コルダはどちらも違うと思つた。

確かに二つとも、コベラ式の術の中に存在する。だが、どちらも”詠唱系”に分類されるのだ。

呪文を唱えなければ発動しないし、属性変化術みたく呪文が一言二言ではない。当然、詠唱すれば二人が聞き逃すこともない。

生憎、声は聞こえなかった。しかし、隣にいるレナはタクトがどうやって消えたかを知っているようで、「逃げたな！」とそこにいない彼に向かって叫んでいた。

そんな彼女にコルダは落ち着くよう促す。

「どうどう。落ち着きなつて」

「……私馬じゃないよ！」

「……あつれー？」

――促すどころか、彼女を怒らしていた。何が悪かったのかと首を傾げるコルダに、シュリアは「何やっているんだ、お前達は」とため息をついた。

## 第9話 波乱 〵〵 (前書き)

もつそろそろ、一年編、第一章が終わりそうです

## 第9話 波乱 Ⅲ

「うまくまけたかな……？」

霊印流歩法、瞬歩でその場から離れ、物陰に隠れたタクトは一人呟いた。

レナのことだから、多分術を使って自分の居場所を特定するだろう。タクトはそう考えている。

そのため、まくことなど出来はしないのだが、少しでも時間を稼ぎたかった。

「そう思っなら、事情を説明すれば良かったのに……」

タクトの周りを飛ぶコウがため息混じりで正論を突く。まあ確かに、と苦笑いしつつそれでも、と彼は言う。

「事情を知ったら多分、てか絶対付いてくるよ。もし乱闘騒ぎになつたらつて事を考えたら……」

「なるほど。」あの力”を使わせたくないということだな」

タクトは頷き、

「そういうこと。それよりも、今はマモルの方を助けないと」

そうだな、とコウが呟き二人はマモル達が向かっていった場所へと駆け出す。

まだ乱闘騒ぎになるかどうかかわらないのだが、あの取播き連中と陰險な雰囲気を見れば、用心するに越したことはない。

瞬歩も織り交ぜながら走るので、偶然いた見物人からはいきなり消えて、離れたところにフツと現れたかのような錯覚を感じさせた。生徒達が「なんだ？」と疑問に思う中、その光景を見た一人の生徒が驚きを持って見つめた。

やがて彼の視界から消えると、その生徒はへえーと面白そうな笑顔を浮かべる。

「今年は生きの良い奴が入ってきたな」

クツクツクツと笑みを浮かべるその生徒は、タクトが消えていった方向をしばらく見つめ。

傾いてきた太陽が、彼の赤髪を明るく照りつけた。

~~~~~

「……………」

「そうブスツとするなよ」

アイギット達に連れられて第二アリーナにまで来るとマモルは終始無言だった。双方はにらみ合う形で対峙しており、彼の無言を怯懦と見なした彼らは、唇をニイツと歪めマモルに凄みをきかせる。

だが、それらには一切関わらずに憎らしいほどの落ち着きを見せる彼が氣にくわず、

「てめえ、余裕ぶっこいてんじゃねえぞ」

「……………」

取播きの一人がヤジを飛ばす。だが、それさえも無言を返す形で応じ、彼らの怒りを高める。怒りが絶頂に達する寸前、不意にアイギットが声をかけた。

「随分と余裕そうだな。流石は入試の時高評価だった奴だ」

その言葉に、ようやくマモルは反応した。

それまで俯き加減だったのが、急にアイギツトの方を見やり、眉をひそめた。彼ーアイギツトは、こちらに背を向ける形で立っており、それを見たマモルはフンと鼻を鳴らし素っ気なく言い放った。

「そうみたいだな。それがどうした？」

「実を言うと、俺も高評価だったんだ」

それを聞いて、マモルは再び眉をひそめた。

（こいつ、何が言いたい？）

その心の声に應えるように彼は続ける。

「まあ当然だよ、あれだけ苦労したんだし。……日頃武術を習い、魔術を習い、勤勉に励み。それでようやく高評価をとった」

最初は自慢話がしたいのかと思ったがーどうやら違つようだ。

彼の一言一言には棘があるように感じられる。また、「あれだけ苦労した」のあたりで、当時の事を思いだしたのかどこか遠くの方を見やった気がした。後ろを向いていても、それぐらい感じ取れる。彼の独白は続く。

「ようやく……ファールド家に恥じない高評価をとったんだ。だけど」

そこでやっと、彼は振り返りこちらを見た。

目を見た。彼の憎悪に満ちた目を。
その目を見て、マモルは悟った。

（そういうことか）

なんちゅう甘ちゃんだー心の中でため息をつく。

そこでマモルはようやく彼らしい行動を見せた。つまり、ニッと笑ったのだ。

「なんで、無知な世界から来た君が、”君たち全員が”俺と同等なんだよつ……！」

ー彼は許せなかった。

何も知らない世界から来た奴らが、何も苦勞もなしに自分と同等になると言うことが。そしてそれは、彼の取播き達も同じであった。身分の差はあれど、やはり彼らにもプライドがある。それを、ひどく踏みにじられた気がしたのだ。
だからー

「俺達はー」

「愚痴は終わりかい？」

アイギットの言葉を遮って、マモルはイライラしげに言い切った。
愚痴ーそう言い切ったマモルはため息をついた。

「な、何だと……？」

目を白黒させてそう呟く彼らに、マモルは頷きながら答えた。

「お前らの言ってることはただたんの愚痴だ。甘ちゃんだよ、おま

えらは」

その言葉に、マモルを睨みつけてくる取播き達。だが、それらの眼光には一切関わらず、それどころか逆に睨みつけたりする。

「確かに俺達は精霊の事を知らない世界から来た。…俺だってガルと出会ってなかったら、精霊の事なんて一生知らなかっただろうしな。だけどー」

マモルの脳裏に浮かぶのは、十年近く前に起こった出会い。もしあのとき出会わなければ、マモルは今とは違う道を歩んでいただろう。だが、あのときのことを悔やんだことは一度もないし、それどころか今の道で満足している。

「ーいや、だからこそ、知ろうと思ったんだ。精霊のこと、魔術のこと、異世界のこと。それらのことを知って、鍛えられて、それで今の俺がある」

取播き達を順繰り順繰り見やりながら、最後にアイギットに目を移す。

彼らはマモルの言葉を聞いていくと、様々な反応をしてきた。

いぶかしむような目つき。疑いの眼差し。ー目を見開いた、共感。様々な感情が目に表示るなか、アイギットだけは無表情だった。

何を考えているのかよくわからないーこんな目つきをする奴は、大抵危険だ。思わず目を細め、マモルはアイギットの様子をうかがう。

「……そうか、お前はそう思っているんだな。ならー」

彼は一度目を閉じー次に開いた時は、こちらを睨みつけていた。

腰のあたりに魔方陣を展開させ、そこから証を取り出す。

手を保護するナックルガードを取り付けた細剣――レイピア型のそれを構えるなり、その切っ先をビュツと突きつけた。

それにならない、彼の取播き達も一斉にそれぞれの証を出現させ、思い思いに構える。しかしマモルも黙っていない。武器を取り出した取播き達を見るなり、すかさず己の証――二丁銃を取り出し周りに目を配る。

彼らとは違い構えこそしないが、それでもいつでも動けるよう楽な姿勢をとるさまは、中々どうに入っていた。

「共に苦勞した者同士、どちらが上か」

アイギットが呟いたその時だった。シュインと微かに何かを引き抜くような音がして――

「――雌雄を決しようではないか」

――取播きの一人が吹き飛んだ。

「な……！」

突然の出来事に呆然となる取播き達。彼らがその一人を吹き飛ばした方を向いた。顔を俯け、誰かはわからない。しかし、二人にはわかったようで、マモルはハツと鼻で笑い、アイギットは目を再び閉じた。

「――そこにいる、君の友人と共に」

取播きの一人を吹き飛ばした少年――タクトは、刀を片手にゆつくりと顔を上げた。

第10話 放課後の戦い〜1〜（前書き）

やっと話数が二桁だぜ！

そしてまだまだ続くよ！

第10話 放課後の戦い〜1〜

いきなりの乱入者に、取播き達は啞然とし、やがてハッと我に返った。同時に乱入者―タクトに向かって、ギャーギャー喚き立てる。

「おいテメエ、いきなり何しやがる！」

「ここを何処だと思っていやがるんだ！」

その問いかけに、タクトはしれつと返す。

「第二アリーナ。それぐらいわかってるよ」

『そういうことを聞いてんじゃねえ！！』

彼の本気なのかふざけているのかわからない返答に、取播き達から一斉に突っ込まれる。だが、それを無視してタクトはマモルに歩み寄る。

未だわめいている彼らを尻目に、

「加勢する？」

「まあ、頼むわ」

端的に、しかし一瞬で内容が理解できる言葉を交わしつつ二人はそれぞれ得物を構えた。そんな二人を見比べたまま、アイギットは目を細めて呟く。

「……それで、君も彼と同じ口かい？」

「はい？」

彼の言葉に首を傾げるタクト。そんな彼を見て、マモルはずいつと前に出た。

「ああ、こいつも同じさ。それどころか、俺以上に苦勞してきた奴さ」

「…どう言つこと？」

隣でタクトが全く訳がわからないというふうに状況説明を求めるが、マモルはそれに付き合わず、さらに続ける。

「少なくとも、”練習量”という点においては多分俺やお前以上だぜ」

「…マモル、もしかして…」

彼の言いように心当たりがあり、それについて聞いてみたが、予想通りというかただ頷くだけだった。やはりか、とタクトはため息をついた。

「余計なことを……」

愚痴りつつ、タクトは正眼で構えた刀をそのまま背後にビュツと振るい突きつけた。そこには後ろから襲いかかるうとしていた取播き達があり、彼の刀を前にその場で立ちすくむ。彼にしては珍しく、やや低い声音でささやいた。

「そこまでにした方がいいよ。君たちじゃ、僕らの相手は役不足だ」

その低い声音と睨みつけるような眼光に、取播き達は後ずさる。

どう考えても先程の少年とは思えなかった。

いきなり乱入してきたときの出来事でさえ、本当に彼がやったこと

なのか若干疑いを持った一同だが、今の彼の表情を見て核心になった。

間違いないく、先程仲間を叩きのめした本人だと。だからこそ、取播き達は恐れを振り払い、二人に迫る。タクトはそんな彼らを見て一瞬目を瞑りーすぐさま見開き刀を振るう。

「さんたち靈印流参之太刀ー」

ーその牙は、誰の目にも止まることはなくー

振るった刀が静止、つまりタクトは刀を振り切った姿勢で硬直。すぐさま、それは起きた。

ーヒュンー

刀と言わず、物を振るうさい生じる風切り音。それがなった。なること自体に問題はない。それはいわば常識である。しかし、それでもなお、問題があったー

「ぐはっ!？」

取り巻きの一人が、やや時間を置いてその場に崩れ落ちた。

彼らの目が驚きで見開かれる中、タクトは静かに放った太刀の名を呟く。

「しゅんが瞬牙」

超高速の斬撃ーそれこそ、風切り音が遅れて生じる、いわば”音速超え”の斬撃。風切り音が、刀を振るった”後”に鳴ったのは、これが原因であった。

壱之太刀、爪魔とは違い威力こそないものの、そのスピードには目を見張る物があつた。

その攻撃を見てアイギットは驚愕の表情を浮かべたが、すぐにフツと笑い、

「霊印流、か。…初めて見た」

面白げに見つめる彼だが、タクトはその言葉を聞いて目を見開いた。

「え……知っているの？」

タクトとしてはそちらの方が驚きだった。何せ、霊印流は”地球”で作られた、そこだけに伝わる流派。そういった事情があるため、フェルアントでは誰も知らないと思っていたのだが。

「十六年前の改革――その時の功労者の一人が使っていた流派だからね。その筋では有名な武術だよ」

アイギットの言葉を聞き、へえ〜と相づちを打つタクト。と言うか知らなかったのか、と隣のマモルがため息を吐く。

「お前……。アキラさんが言ってただろうが」

小声でタクトを突きながら言うが当の本人は、

「……言ってたような、言ってなかったような……」

要するに、忘れたと言うことだろう。ふうつと深いため息をつき、マモルは後ろを振り返る。

そこには、今にも飛びかかってきそうな取播き達の怒りに染まった

表情――それがずらりと並んでいた。

「あ……。もう覚悟決めた方が良い」

そう呟き、がつくりとうなだれてしまったマモルを見て、取播き達は凶悪な笑みを浮かべた。

「へん、どうやらボコられる覚悟が出来たらしいな」

「訳わかんねえ術を使っらしいが、所詮多勢に無勢だ。一気に行くぞ！」

『おおー！！』

取播きの中のリーダー格がそう叫び、それと同時に彼らが一斉に襲いかかってきた。
しかし――。

突然、乾いた爆音が鳴り、取播きの一人が突然倒れた。

「なっ！？」

あまりの出来事に、彼らは音の鳴った方へ目を配り爆音――いや、銃声が鳴った方を見た。ゴツイ銃を構えながらマモルはニッコリと笑い、

「勘違いしてるみたいだけど」

――銀光一閃――

刀が空間に”線”と言う軌跡を描く。その描かれた軌跡に触れた取

播きの一人が吹き飛ぶ。

吹き飛ばされた彼は、近くにあった物置にぶつかり、派手に転倒する。一連の動作を見て、大半の目がそちらを見やった。

「壱之太刀――爪魔」

魔力を纏った爪、という刀は再び空中に線を描き出す。

「覚悟を決めるのは、そっちだぜ」

実力差のありすぎる戦い。人はそれを、”処刑”と言う。

第10話 放課後の戦い②

振るわれた刀が静止、それと同時に最後まで立っていた取播きがドサツと倒れた。

タクトはそれを目の端で捉え、刀を肩に担いだ。

「終了、っと」

指先で証をくるくると回すマモルに目をやり、タクトは問いかけた。

「マモル、大丈夫？」

「そういうお前こそ……って……。大丈夫か、お前だし」

「いや、僕だからってどう言う意味？」

嫌な信頼のされ方だよ、と内心で愚痴り、マモルを睨んだが、彼はそれに付き合わず、アイギットに銃口を突きつけた。

そして告げる。彼らの勝利宣言を。

「チェックメイトだ」

告げられた勝利宣言を前にして、アイギットは驚愕の表情を見せ、ただその場で膝をついた。

――のだったら、話は早かったのだが。

生憎彼はただ瞳を閉じ、顔を俯いたただだった。見方によっては後悔しているふうにも見えるし、詰まらなさそうにしているふうにも見える。

タクトとマモルは、互いに顔を見合わせアイギットに詰め寄る。身長差はアイギットとマモルが同程度、タクトがややそれより低い、と言った物なので、アイギットの顔を見るためにやや顔を上げない

ればならない。

だからこそ、見る事が出来た。

彼の唇が、モゴモゴと”動いた”のを。

嫌な予感が全身を走り、タクトはマモルの服を掴んで後ろに下がる。

「うあ、何するんだタク……っ！」

マモルが吠えたのと同時に、アイギットの眼前に青い魔法陣が展開された。それを見て合点がいったのか、口を閉ざし。

自らも後方に下がった。それどころか、タクトに体を預けた。

マモルを掴み、彼が体を預けてきたのを確認すると、タクトはそのまま瞬歩を使用。人二人分での瞬歩はきつい物があり、片足に馬鹿にならない負荷がかかる。

しかし、それで何とか間に合った。

二人がその場を離脱するのと、魔法陣から水が噴き出すのがほぼ同時だった。ならば、回避できるかは両者の早さ次第。

――そして瞬歩は、水より早かった。

なんとか回避すると、二人はその場に立ちすくむ。幸いと言つべきか、それともアイギットの意味なのか放たれた水は倒れている取播き達には当たらず、そのまま流れていく。

それを見届けると、突然タクトが小さくうめき声を上げ、その場にしゃがみ込んだ。

「うつ……」

「大丈夫か？」

彼にしては珍しく、やや心配しているかのような声音である。――あくまでも、ような、であるが。

それは置いてくとして、タクトは右足をさすっていた。

少しの間さすっていると、若干良くなったのか、「大丈夫」と呟き、

そのまま立ち上がった。当然である。

霊印流歩法、瞬歩。たった一步の踏み込みで発動するこの歩法、原理は極めて簡単であった。

まず、右か左か、踏み出す方の足に魔力を注ぎ込む。魔力を注ぎ込むと、注ぎ込まれた部位の細胞が活性化――つまり身体能力が増加する。

もともと精霊使いは契約を交わした時点で身体能力が跳ね上がっている。そこからさらに上乘せさせる、いわば多重強化だ。

だがこの多重強化、まともな精霊使いは使用しない強化術である。強化系の術は詠唱系の魔術に含まれている上、魔力による強化術は反動がある。詠唱によるタイムラグなしで強化できるのはいいが、その反動がやっかいなので滅多に使わないのだ。

一応瞬歩は特殊な踏み込みを行う事で、その辺の改善を行っており、あまり反動はこないのだが。今回は、慣れない二人での瞬歩が原因であつたのだろう。

「僕は大丈夫だよ。それより、アイギットは……」

そう言いながら、二人で彼の方を向く。アイギットは無表情な目で二人を観察していた。その様子を見て、タクトは何か言いようのない不安を感じた。

（何だろう、あいつ……）

疑心の目でもってアイギットを見つめるが、マモルはそれに気づかないのか声を沈めて唸った。

「てめえ、不意打ちとは良い度胸してんじゃねえか」
「……」

マモルの脅すような声音にも怯むことなく、それどころか小さく何かを呟き――

「ちっ！」

舌打ちを一つし、マモルはバツと後方に下がる。アイギットの目の前に展開されたのは青い魔法陣。

現れるのは再び水か、と思われたが。

突然、タクトとマモルは肌寒さを感じた。体中に突き抜けるような寒さが走り、二人は彼――アイギットの方を見た。

口元に小さく笑みを笑みを見せる彼は、してやったりと言うふうに言い放った。

「水属性変化術――それは魔力を水に変える術式。ならば、その”温度”も変えられるだろう？」

二人は彼の笑みを見て、憎らしげに顔をゆがめた。

彼が展開させた魔法陣。そこから、大きめの杭状の物体――先端が鋭く尖っており、軽くひつかいただけでも怪我するだろう。

だが、その杭を形成しているのは”氷”であった。氷を削って作った杭。彼が魔法陣から出現させたのはまさにそれであった。

――属性変化術。魔力を注ぎ込むとその変化させた物の”質”が上がる。その特性を利用したのだ。

「属性変化改変――。何ていうモンを」

マモルはその技法をぽつりと呟いてため息をついた。すさまじく厄介な相手――それこそ、周りで倒れている取播き達とは比べものにならないくらい。

（どうやら、かなり高度な修練を積んだ相手のようだな）

ガルが感心したように言うが、こちらとしては構ってられない状況になった。

アイギットが生成した氷塊が二人めがけて飛んできた。それにいち早く反応したのはタクトであった。左腕を前に突き出し、白い魔法陣を展開。魔方陣が氷塊を防ぐ盾となる。氷塊と陣がぶつかり、陣が僅かに歪む。が、何とか持ち堪えた。

「なかなかの堅さだな」

「……っ」

アイギットはタクトが展開させた魔法陣の堅さを素直に賞賛する。賞賛された本人はそれに答える余裕はない。彼は眩きを漏らし、

「だけど、これならどうだい？」

――彼の周りに十を超える青い魔法陣が展開された。

展開された魔方陣すべてから先程よりも小さな氷塊が生成され、それら全てが一斉に飛来する。小さいとは言え、数が数である。それら全てを防御魔法陣で防ぎきる自信はない。

驚愕の表情を浮かべる二人に、氷塊が迷うことなく二人がいるがいる場所に突き刺さった。

第10話 放課後の戦い③

打ち込んだ氷塊によって、巻き上げられた土埃（アリーナの床は全て地である）が視界を覆い隠す。そのため、アイギットは氷塊を放った姿勢のまま、土埃が消えるのを待った。

「……………」

無言で視線を向こうにやり、やがて土埃が収まり出す。

「……………」

舞い上がる埃を通して、うつすらと何かが見え始めた。それが目に入った瞬間、彼は倒せなかったかと、舌打ちを一つしてして呪文を唱え始める。もちろん、詠唱した術式は属性変化術。

魔法陣を展開させ、氷塊を生み出す。

そして、土埃が収まったと同時に、氷塊を飛ばそうとして――

「なっ……………！？」

目の前の光景に、思わず驚きの声を上げた。

土埃が消えたそこには、まるで落書きのような形をした土人形が二体。しかも、ご丁寧に舌まで突き出すという、一見笑っちゃいそうな物であった。

そして、その土人形の足下にはオレンジ色の魔法陣。つまり、土属性変化術である。

「フェイク偽物……………！？それじゃあいつらは……………」

目を大きく見開き驚愕の表情を浮かべ、アイギットは周囲をくまなく見渡す。

「何処だ……。どこにいる！」

声を大にして、左右に目を配りつつ叫び――

「上だよ」

ぽつりと呟かれた言葉――それが耳に入ってきた。

声のした方に顔を上げ、声をかけてきた奴を目撃する。見つけた彼――タクトは、足下に白い魔法陣を展開させ、それを”足場にして”空中にぽつんと立っている。それを見て、アイギットは再び驚愕の表情を露わにさせ、歯をくいしばった。

霊印流――どうやら、聞いていた以上に厄介な物らしい。聞いた事では、霊印流の強みは早さと容易さ、そして技――太刀の豊富さ。どれも当時はあまり強くはなさそうだなと思ったのだが、どうやらそれは完全に間違いだったようだ。聞いたのと実際に目の当たりにするのでは全く違う。

タクトは魔法陣の上に立ったまま、瞑目し。次の瞬間、二人の周りに白い魔法陣が所狭しと乱立する。

「なっ……………」

そのあまりの光景に、辺り一面キョロキョロと見渡すアイギット。しかし、その視界の大半が魔法陣で埋め尽くされている。

「これは、一体……。……………」

訳がわからず呆然とするだけの彼は、タクトのその後の動きを目の

片隅に捉えた。嫌な予感が全身を走り、アイギットは彼の方へと向き直る。

「靈印流歩法――」

そして、彼は最初の一步を踏み出そうとして――

「っ！まさか」

そこで、アイギットはあることが頭をよぎった。そして、深く考える間もなく、彼は直感で予想道りになると確信した。

「瞬歩――」乱――

タクトの呟きの最後に付け足された”乱”という言葉。それが何を意味するのか理解するのにはさほど時間はかからなかった。二人の周囲に張り巡らされた魔法陣。それら一つ一つを足場にして”連続で瞬歩を行う”。タクトはまさにそれをやっていた。

もはや彼の姿は確認するのですら困難になり、アイギットの目には微かな影しか見えない。

魔法陣と魔法陣を、まるでピンポン球のように飛び跳ねながらタクトはアイギットに襲いかかる。襲われたアイギットはただ己の証であるレイピアで、タクトの斬撃を受け流すのが精一杯であった。

何せ、四方八方――前後左右、さらには上からまで斬撃が降り注ぐのだ。とてもじゃないが、反撃など出来そうもない。ましてや、呪文を唱える僅かな時間さえ、相手は与えてくれない。

「くっ……！」

顔を苦痛の表情で歪ませ、アイギットはタクトがしたように己の前

に防御魔法陣を展開させた。しかし、安心する間もなく、魔法陣の横から繰り出される刀に気づき、バツと横に飛ぶ。

かろうじて回避に間に合ったが、下手したらまともに食らっていたかもしれない。思わずぞつとしたが、流石にアイギットはエリートを自称するだけはあった。

冷や汗を流しつつ、回避したと同時に属性変化の呪文を唱え、反撃の用意に出た。そしてそのまま体勢を整えると、足下に青い魔法陣を展開、そのまま巨大化する。

辺り一面青く染まった地面に目をやりながらも、その目の片隅に何かが飛んで来るのが見えた。が、それをろくに確認しないまま、アイギットは魔力を一気に解放した。

「魔力の消費が激しいから、あまり使いたくはないんだが……。もう、そんなことも言ってられないしな」

そう言つて、アイギットはニツと笑った。そして発動させる。己の中の、最高の一撃を。

――語り継がれるは、氷結の世界――

次の瞬間、青い魔法陣から”それ”が現れた。

辺り一面氷の世界。地面の上はおろか、アリーナの壁にまで氷が張っている。体感温度が急激に下がっていき、思わずくしゃみが出そうになる。

だが、現れたのはそれだけではなかった。

氷の塔――それがふさわしい形容か。太く長い柱が魔法陣から現れ、その頂点にはいくつもの突起があつる。その光景を見て、タクトは驚きのあまり思わず足を、瞬歩を止めてしまった。

――つまり”スキ”が出来た。

「馬鹿、足を止めるな！」

どこから響いてきたマモルの叫びを受け、タクトはハッと我に返る。が、あまりにも遅かった。アイギットは口元に笑みを浮かべながら、

「――これで終わりにする」

あまりにも遅い、しかし、もしかしたら間に合うかもしれない回避行動をとるが、やはり間に合わない。彼はアイギットのその眩きを聞いて。

突然、塔にひびが入った。

その亀裂は一気に全体まで走り。次の瞬間、塔は砕け、大小様々な破片がタクトに襲いかかってきた。

第10話 放課後の戦い〜4〜（前書き）

よっしゃー、テスト終わったぜ！！

第10話 放課後の戦い④

アイギットが放った氷塊。それを土の属性変化で壁を作り何とか防いだ後、身を隠しタクトを囷にする。二人の得意分野を考えると、彼を囷にした方がやりやすいのだ。ともかく、マモルはタクトの動きを見つめながら呪文を詠唱し、足下に土色の魔法陣を展開。タイミングを伺う。

だが、アイギットも見事なもので、水の属性変化を使い氷の塔を生成した。

(……嘘だろ……)

啞然とした表情で彼が作り上げた氷の塔に目を奪われたが、すぐに我に返った。が、彼の相棒はまだボケらつとしたままだった。それを見て、マモルは思わず声を荒げる。

「馬鹿、足を止めるな！」

その一言でやつと我に返ったようだがもう遅い。氷の塔に一気に亀裂が走り、崩れていく。大小様々な氷の破片が迷うことなくタクトへと殺到していく。

(あの馬鹿っ！くそ、間に合え！)

毒づきながらマモルは属性変化術を唱え直し、火の術式に作り変える。一度展開させた土色の魔法陣が、一気に赤く染まっていくのを見るなり、マモルはそのまま陣を巨大化させる。ちょうど、アイギットが展開している魔法陣と重なり合うように。

二つの異なる属性を持つ陣がピタッと重なると、変化は一気に起き

た。

ジュウツと熱した鉄を水の中にぶちまけた音が鳴り、蒸気が一気にあふれ出る。それと同時に、二つの魔法陣が反発し合い小さなパリスが周囲に走り出す。

「なっ！？」

「マモルっ！？」

いきなりの現象にアイギットは驚愕の表情を露わにさせ、タクトは純粋な驚きと確信に満ちた声音を出した。そして、赤と青両方の陣が点滅を開始するなり、作り出されていた氷が、一瞬ぶれたように見えた。

（っ！まずい！）

属性変化とは言わず、全ての術式には弱点がある。それは三つほどあり、一つは自然消滅。どんな術式も、永遠に展開できるわけではないのだ。二つ目は術者がそれを止めること。ちなみに、それは”死”を意味することが多い。

そして三つ目。”魔法陣を破壊する”こと。

氷の破片がタクトに向かって降り注ぐ一方、その氷自体が消滅を開始していた。それが目に見える段階にまで来たとき、アイギットは内心焦りでいっぱいだった。しかし、

（消滅しきる前に、奴をたたく！）

顔をしかめながらも、彼は諦めずに氷塊を振り落とさせる。周りから発生している蒸気が、タクトの体を隠しているが、それでも構わない。氷塊が、タクトがいるであろう場所に落ち、二回程砕ける音が響き渡った。

しかし、そこまでだった。ピンツという何かがはじける音と共に魔法陣が消滅。砕けた氷塊は跡形もなくなっていた。

発生していた蒸気までもなくなり、今日の前を覆うのは、氷塊が地面に衝突した際発生した土埃。もくもくと吹き上げるそれを睨みつけるように見ていた。

異なる魔法陣を無理矢理融合させようとすると、こう言った現象が起きる。マモルは、それを利用したのだ。

「ち、ふざけたまねを……」

舌打ちと共にアイギットは吐き捨てた。しかも、自ら無理矢理打った氷塊のせいで土埃が上がっており、完全に視界が奪われている。仕方なく風の属性変化術を唱える。が、その時何か声のようなものを耳にした。思わず聞き耳を立て、

「霊印流 式之太刀にのたち……」

「え……」

そんな声が聞こえ、思わずアイギットは間抜けな声を出してしまう。そう言えば、爪魔が一で、瞬牙が三だったなど。思わず自分で悠長に考え事するのと突っ込んでしまった。頭を左右にぶんぶん振り、雑念を追い払う。

「飛刃ひじん」

「――飛ぶ刃――」

突然、土埃を切り払い、三日月状の刃物が飛んできた。

「っ……!!」

いきなりのそれに驚愕の表情を見せ、しかしすぐに目の前に防御魔法陣を展開させる。刃物が陣に衝突、数秒の間拮抗していたが、やがて飛んできた刃物の方が光の粒子とかし四方八方に分散、消えていった。

光の粒子となったそれを見て、アイギットは目を見開いた。

（今の、魔力の塊！？）

魔力を刃に集め、それをいきよい良く振るい、飛ぶ斬撃とする。それが式之太刀、飛刃。

もちろんアイギットはそれを知らないが、霧散したのが魔力の粒子とわかったのはたいした物である。しかし、わかったところでどうにもならないのだが。

（どう言うことだ……！）

魔力を刃として飛ばす。確かに、精霊使いの戦い方としてはあまりにも不自然だ。と言うのも、精霊使いの戦い方は主に術を使つての戦闘である。なのに、目の前の相手は術を使わず、魔力での戦いだ。術を使つたのも、偽物を使つてこちらの目をごまかした時だけ。あまりにも、少ない。”術を使つた回数が”少ないのだ。その不自然さを胸に、アイギットは思考を走らせる。

（大規模な術でも使うつもりなのか……）

確かに、これはあり得そうだった。現に今彼が相手しているのはタクトのみ。先程からマモルの姿を見ていないのだ。どこかに隠れての不意打ち。これがとても有力的だった。

「……一つ聞きたい」

「うん？」

アイギットは目を細め、訝しむようにタクトに目をやった。

「何故、術を使わない？」

問いはとても直球的だった。彼にしてみればあまり遠回し的な問いかけは苦手だし嫌いなのだ。家柄のため、そういうことは言ってもらえないのだが、嫌いな物は仕方ない。そう言う事はなるべくしないように心がけている。

それに、どこか相手もそれなりに素直に答えてくれるーそんな気もしたのだ。

タクトはああ、そのことばかりに頷き、

「僕、術って使えないんだよね」

帰ってきたのは、その言葉だった。

「……は？」

あまりのことに、一瞬、二の句が告げられなくなり、はぐらかしたのか、と思った。

「どう言うことだ」

「いや、別にたいした物じゃないんだよ。ただ単に体質。先天的異常……だっけ？」

それを聞き、アイギットは目を見開いた。まさかー

「不反応症候群……か？」

「そう、それ」

彼が呟いた言葉に、軽く頷きながら陣を展開させるタクト。一言呪文を唱えるが、全く陣は反応しない。白いままである。アイギットが聞いた感じ、何処もおかしいところはないはずなのに、だ。

不反応症候群――いくら呪文を唱えても、いくら術に関する知識があっても、肝心の呪文が反応してくれない。精霊使いとしては致命的な病である。それを、彼は患っていたのだ。

――”練習量”という点においては多分俺やお前以上だぜ――

先程、マモルが言っていたことが、やっとわかった。彼は自分以上に強くなるうとしていたこと。同時に、自分はなんて腑抜けだ、とも。

（確かに、甘ったれたな）

俯き、フツと微かに笑う。彼らの事を面白くないと思っていたを恥じた。しかし、やめようとは思わなかった。

ここでやめたら、それこそ真の腑抜けだ。だから――

――宮藤マモル。それから桐生タクト」

「何だ？」

「？」

どこからかマモルの声が聞こえ、目の前にいるタクトは無言で首を傾げた。その反応に、俯き口元に笑みを浮かべたまま、

「先程の非礼をわびる。そして――」

顔をスツと持ち上げ、タクトを――そして、目の隅にマモルの姿を見た。そこにいたか、と苦笑いを浮かべかけたがすぐに引つ込めた。

「真剣勝負だ。――いくぞ！」

そのままレイピアをスツと構え、同時にアイギットは呪文を唱えた。いくつもの青い陣が展開され、それらから氷塊が作り出される。

彼の真剣な眼差しを受け、タクトは驚き、マモルは笑みを浮かべた。

「その気になったか……。よし、タクトっ！行つてこいつ！」

「マモルも行くんだよっ！」

コントなのかどうなのかわからない掛け合いと共に、タクトは刀を構え、マモルは呪文を唱え始める。

「霊印流壺之太刀――」

「いくぞ」

タクトの刀に魔力が纏い、離れたところにいるマモルの周囲に赤い陣が展開される。

そして、そのまましばらく時間が止まったかのような硬直。しかし、それは無限には続かない。三人は、やがて示し合わせたように同時に飛び出した。

第11話 決着

「いっよー、元気が〜！」

やたらと陽気な叫び声が学園の一室から入ってきた。彼が入ったその一室とは、この学園の――

「遅いわよこの馬鹿」

「ふがつ！」

陽気な叫びを上げた男性が、その一室に元からいた一人の女子生徒にグーで殴られた。それも、顔面を。そのままボタンと床に倒れ込んだそれを見て、その場にいた少年がため息をついた。

――この学園の生徒会室である。

つまり、殴られた男子も、殴った女子も、そしてその周囲でため息をついている連中も皆、生徒会の一員である。

本来この生徒会を取り締まる人物――会長だが、その会長が殴られた赤毛の男子、ギリ・マーク。三年生であり、学園内ではとても優秀な人物として知れ渡っている。が、それは表面上だけで実際はかなりちゃらんぽらん。良い意味での不良会長と言っても差し支えないだろう。

と言うか、会長イコール優秀という構図のせいで皆誤解しているだけである。

「くっ、中々良いパンチをするようになったじゃないか。よし、お前には会長自ら”凶暴グーパンチ”という呼称を与えー」

「いらないわよアホ」

皆まで言わせず吐き捨て、彼の腹部にドスツとヒールで踏みつける女子生徒――セシリア・フライヤ。銀髪なのか白髪なのかわからない色素が抜けたような髪を長く伸ばしている。生徒会副会長であり、その美貌から学園の男子達からの告白が数多いという。

ギリは腹を踏み続けられていて、苦しそうにうめき声を出しているが、ふと目をそらすと、ある物が目に入りかけた。

「おお……く、あ……あと……あともう少し……！」
「っー！」

彼の呟きを聞き、セシリアは顔を赤らめ、そのまま目にも止まらぬ速さで彼の側頭部に回し蹴りをたたき込んだ。……ミニのスカートでそんなことをすれば、中が見えてしまうのだが、彼女は構わなかった。実際、気絶したギリも、気を失う瞬間何かを見た気がするが、せいぜいその程度である。

床にゴツンと頭を打ち、白目をむいて倒れ込んだ彼を前に、セシリアはまくし立てる。

「あ、アンタはそうやっていつもいっつも……！ 少しは反省しなさい！ この大馬鹿ア！ ド変態イ！」

「……聞こえてないと思うんだが……」

眼鏡をかけた大人しそうな少年――フォーマーが呟いた。かなりの童顔で、見た目よりも遥かに下に見えるが、これでも生徒会のもう一人の副会長である。ちなみに名字はない。

その彼がずれた眼鏡をクイツと持ち上げ、気絶した会長を尻目に、

「と言うか、我らが会長殿は何の用で来たんだ？」

「あ……」

フォーマーの言葉に、そう言えばという表情を浮かべ凍り付くセシリア。時計の針を刻む音がはつきりと聞こえるほどの静寂の中、二人は視線を交わし――やがてフォーマーがはあっと深いため息をついた。

「ま、しょうがない。どうせ大した用事でもないだろ」

「そ、そうよね！ 大した用事でもないし、私がこいつを殴ったのは単なる事故だし！ ね！」

あくまで自分のせいではないと言い張るセシリアに対し、適当に相づちを打っておく彼の姿は、どこか諦めにも似た何かがあった。

~~~~~

マモルの火とアイギットの氷が激突、そのままジュウツと蒸気が上がる五月蠅い音が第二アリーナに響き渡った。だがそれは、一度や二度ではない。何度も何度も、少なくとも十以上は鳴っただろう。やかましい音が演奏を奏でる中、タクトとアイギットは互いの剣をぶつけ合っていた。

「ヒュッ」

短く鋭い呼吸と共に刀を振るい、タクトは相手のレイピアを弾く。そのまま流れるような動きでがら空きになったアイギットの胸を切り払う。

無論、斬るつもりはない。その証拠に、彼の証は刃を変形させ、それを潰している。そして、刃を潰しているのはアイギットとて同じであった。もとより彼は、相手を痛めつけるつもりだったのだ。下手に流血沙汰になるとこちらも只ではすまなくなる。

「くっ！」

胴を切り払おうとした一撃に対し魔法陣を展開。盾となった陣がその一撃を防いだ。が、それはある意味悪手でもあった。防がれた、その瞬間にタクトは瞬歩を”二度ほど”使い、相手の背後に回り込む。

「っ！ このっ！」

一瞬で背後をとられたことを悟ったアイギットは苦々しげに顔を歪ませ、そのまま前転。刀の一撃をきわどく回避する。

避けたことを内心でほっとしつつ、アイギットはすぐさま体勢を立て直すとそのまま後ろへと斬撃を放つ。が、相手はそれを刀で受け止め、そのまま斬り流した。タクトは斬り流した勢いをそのままに、今度は袈裟斬りに振り切る。

「っ……っ！」

こちらの攻撃のほとんどを無力化されたことに顔をしかめ、アイギットは振り下ろされた斬撃を後ろに下がって回避する。

（まずい……っ！）

率直な感想だった。自分と相手との剣の差は歴然としている。このまま斬り合いになったら、間違いなくこちらがやられる……っ！だからこそ、あちらは使えず、こちらが使える”魔術”を！

そして、あいつの”弱点”を！

「……」

早口で呪文を唱え、アイギットはそのまま手を伸ばす。伸ばした手のひらから青い魔法陣が展開。そしてタイミングを見計らい――氷塊を作り出した。

「前、前！」

「やばっ！」

今度はタクトが慌てる番だった。

相手と開いた差を瞬歩で一気に詰めようとして、それを使用した直後だった。タクトは、そのままアイギットが作り出した氷塊に、  
「自分から突っ込んで」――

「死んでたまるかつ！」

ギリギリのところで再び瞬歩を使い横へ移動。氷塊へ特攻コースからなんとか外れる。

「危なかった……」

「お前は神風か」

マモルがふうつと安堵しつつ、タクトに近寄りそう呟く。

彼が回避したその様を見ていたアイギットはやっぱり頷いて見せた。

「やはり瞬歩……。 ” まっすぐ ” にしか進めないようだな」

その言葉にタクトは頷いて見せた。

「そつだよ。……でもこんな早くに見破るなんて……。流石はエリートだね」

「それはどうも」

隠す気もないのであっさり肯定したが、内心でははらはらしていた。何せ、まっすぐにしか進めないことを見破り、それに対して対処して見せたのだから。

アイギットの背後へ回り込む際、瞬歩を二回程使用したのはそのせいであつた。そして、まっすぐにしか進めないのなら待ち構えていればいい。そのことに気づくことが出来たアイギットは、やはり才能を持っている。

「弱点はわかつた。もう、瞬歩とやらのアドバンテージはない」

「……ホントにそう思っているのか？」

彼の言葉に応えたのはタクトではない。マモルはアイギットの方をじっと見つめながらそう言った。

「何？」

「確かに瞬歩のアドバンテージはなくなった。だけどー」

そう言うなり、マモルは手を伸ばし、銃を突きつけた。

「“二対一”と言うアドバンテージはなくなっていない」

銃口に魔法陣が展開され、その陣が金色に輝き出す。金ーそれは属性変化で言えば、雷を表す色彩。

驚愕に目を見開くアイギットを見て、マモルはニヤツと意地汚く笑って見せた。

「チェックメイト？」

「……なんで疑問系？」

タクトが首を傾げながら呟くのと同時に、マモルは引き金を引いた。銃口から放たれた弾丸が金色の陣を通過。その瞬間――

――弾丸が、雷を纏った――

雷を纏った弾丸は矢の如く突き進み、アイギットへと向かう。

「っ！」

雷が纏う瞬間を惚けたように見ていたマモルは、すぐさま我に返り、その一撃を横に飛び込むことで何とか避けた。

――風が舞った――

避けたその瞬間だった。何故か室内で風が鳴り――ドツと腹に衝撃が来たのを感じた。その衝撃で意識が飛んだ。

視界が完全に真っ暗になる前に見たのは、タクトが持っている刀が腹に当たっているところだった。

## 第11話 決着（後書き）

やっとタクト&マモルVSアイギットが終わったよ……

次からは序盤で出た三人組と、タクト達のその後です（多分

## 第12話 それぞれの思い（前書き）

すみません、予告した通りにはなりませんでした……

もう二度と……もう二度と、予告などはしないです……！（え

……はい、ホントすみませんでした

## 第12話 それぞれの思い

アイギツトを気絶させ、彼をそつと地面に横倒せると、タクトは証をしまった。それに倣いマモルも証を片づけたが、二人はそこで顔を見合わせた。

「こいつら……どうする？」

「うーん……」

マモルの問い掛けに、首を傾げる。彼等を気絶させたのは自分達なのだから、何とかしなければならぬのだろぅが、異様に面度臭いとは言え、このままほったらかしと言うのも後味が悪い。

どうした物か、と思い悩んでいると、いきなり第二アリーナの入りが開かれた。突然のことに二人はそろってそちらの方を向き、そろって口を開けた。

『シュリア先生！？』

「ここにいたか、馬鹿ども」

入り口にいた女性――シュリア・ローファその人がいた。何でこの人がここに――二人は声に出さずにそう心の中で叫んだ。

特にマモルは、怒っているシュリア<sup>イコール</sup>鬼。そんな失礼極まりない図式がマモルの中にあつた。その原因は100%彼にあるのだが。

また、第二アリーナに来ていたのは彼女だけではない。

鈴野レナ、コルダ・モラン。その二人もいた。

……レナの方はカンカンに怒っており、そんな彼女を見てタクトとマモルはそろってため息をついた。

（なんか、すごい厄介な事になりそうだな……）

（僕も同感だよ）

「桐生、宮藤。二人とも、こっちに来い」

二人はシュリアに促されるままにトボトボと歩いていった。

~~~~~

「全くもう、タクトは!!」

何で、怒られているのは僕だけなんだろう？ そんな文句を口に出来るはずもなく。タクトは今、自室の床に正座でレナの説教を受けていた。

ちなみに、この狭い部屋の中にタクトやレナ、マモルとコルダの四人が詰め寄っていた。こんな狭い部屋に集まるなと思うタクトであつた。

あの後、シュリアに呼び出され、怒られるかと思いきくびくびくしていたが。そんなことは全くなく、ただ乱闘騒ぎになった事情を言つたらその場は解散となつた。彼女曰く、「乱闘騒ぎは褒められた物ではないが、状況を鑑みるに仕方のないことだつた」とのこと。実際、彼らの行いにはすでに教師陣の目が光っており、様子を見ていたらしい。

（乱闘になつただけでもやばいのに、お咎めなし。良い結果じゃないか）

（レナの説教を聞いていて、良くそんなことが言えるね）

（こっちの方が嫌なのか？）

（うん。本気で怒ると怖いから……）

「ーだいたいタクトは……って聞いているの!」

「はい、聞いてます!」

コウの呼びかけに諦め半分で答えていると、まるでコウと会話していたのを見抜いたかのようにレナの鋭い声が飛ぶ。ひととき大きな声で返事をするタクトを見ながら、マモルはニヤニヤと笑っていた。

「いや、お前らの会話ってホントあれだな。こつ、夫婦ゲンカに見えてー」

「マモル？」

（え、笑顔が怖い……）

余計なちゃちゃを入れようとしていたマモルに、レナが笑顔で彼の名前を呼んだ。そんな彼女に、「何でもないです。どうぞ続けて下さい」と頭を下げた。

それを座っていたタクトは「なー！」という、目の前で裏切られた人の顔を見せた。

再び始まる、タクトへの説教。それを馬耳東風と聞き流していたが、隣にいるコルダが話しかけてきた。

「ねえねえ。なんでレナは怒っているの？」

「え、ああ。タクトがまた無茶なことしたからだろ」

「それだけであんなに怒る、普通」

それを聞いて、マモルは若干感心してコルダを見やった。

「よくわかったな」

「へっへーん！ 人間観察は得意分野だもん！」

「そ、そか」

彼女の答えに、苦笑いを浮かべてマモルは考える。

（うーん、どこまで話そうか……）

目の前で行われているレナからタクトへのお話。それを何となく見つめながら彼は口を開いた。

「色々と気になる奴だからな」

「それって、男女のアレ？」

「……それはあるだろうな、多分。と言ってもタクトは気づいてないだろ」

二人は小声で語り合っている。何となくため息などをつきながら、マモルは続けた。

「でも、レナは自分の思いを伝えない……いや、伝えられないと思っ
っているんだろうな」

「へっ？」

「……あいつ、自分のせいで大切な奴に怪我を負わせてしまってね。
それで伝えるのをためらっているんだろうな」

「怪我？ でも、大きな傷は負っていないみたいだけど……」

「あいつが何で、髪の毛を長くしているのか、少し考えてみる」

そう言うと、コルダはタクトの髪の毛に目を移した。黒髪の、セミ
ロングの長さ……。

「もしかして、それを隠すため？」

「そのとうり」

それだけ呟くと、彼は軽く頷いて、コルダの方に向き直った。

「だからこそ、あいつは心配なんだろうな。……また、あいつが怪
我を負わないか」

目を閉じ、その当時の事を軽く思い出した。

地面に伝って流れ降りる赤い血。痛みに横たわり、苦痛のうめきを漏らすあいつ。怪我を負った部分を必死に押さえているあいつ。そして、そんな二人を見ながらゲスな笑い声を上げるあいつ。

もう、たくさんだった。だから――

「だから、世話を焼きたがるんだ。――な、レナ!」

「? 何」

「もうその辺にしてあげたらどうだ? もう燃え尽きてるぞ」

タクトの方を指しながら、そう答えるマモル。もう彼は完全に真つ白に燃え尽きている。それこそ、灰すら残さぬほどに。

元々彼は正座には慣れているため、そんなにきついとは思わないが、ここでの燃え尽きているはそう言う意味ではない。

彼女の説教に疲れ果てた。こっちが正しい。

そんな状態の彼を見たからか、コルダは、

「あたしもフジと同意見だよ」

「いや、俺の名前マモルだから」

コルダの間延びした声に、きつちりと訂正をして、マモルはレナの方を向いた。

若干不服そうだったが、それでもやり過ぎたという自覚はあるのだろつ。ふうつとため息を一つすると、

「わかった?」

「……………はい」

めちゃくちゃ消え入りそうな声を聞くと、彼女はそのまま部屋を出

て行った。それを見送ると、マモルとコルダは一度タクトに視線を送ると顔を見合わせ、互いに肩をすくめた。

第13話 早朝の訓練 ㄱ1ㄱ (前書き)

ども、天剣です。

いやゝ遅れてすいません……。昨日更新しようと思っていたんですが……。

……睡魔には勝てんかった……

第13話 早朝の訓練 ー1ー

アイギットとの決闘から数日後。

部屋の窓から注ぎ込まれる朝日が、とある一室を明るく照らしていた。その部屋の主は、明るくなったことに不快感を覚え、布団のなかに潜り込んだ。

理由ーまだ眠いから。何とも説得力のある理由だろう。彼にとって、睡眠の妨げになる物は忌むべき存在なのだ。

「もう朝だぞ。さっさと起きろ」

「うぬゝゝゝ」

訳わからん寝言と共に、ますます布団のなかに潜り込む少年タクト。ぱたぱたと翼を動かしながら空に滞空する精霊コウはそれを見て、ふうとため息をついた。

「全く……朝に弱すぎだな、お前は」

呟くと同時にコウは、タクトが被っている布団に降りてきてちょこんと止まる。そのまま首を傾げるといふ愛らしい動作をした後、コウの足下に魔法陣が展開した。展開した陣の色は黄色、つまり雷属性の変化術。

「……早く起きろ」

コウにとっては最終警告的な物なのだろう。再びタクトを起こそうと無愛想に声をかける。が、

「うにゅゝゝ」

全く起きず、それどころか布団を引っ張り上げすっぱりとくるまる。先程とは違い、完全に布団に隠れてしまった。と言うか、寝顔も寝言もある意味かわいらしい物がある。それを見て聞いて、何でこんなふうに育ってしまったのだろう、と言う考えが頭をよぎった。

「……………」

これではまるで保護者ではないか。一瞬、そんなことを考えた事を頭を振って追い出し、コウは陣に流れ込んでいる魔力を解放した。

「うあああああ！……！」

タクトの全身に雷が走り、タクトはその痛みあまり絶叫する！

……ちなみにこの寮、しっかり防音対策を取っていたりするので叫んだり騒いだりしても大丈夫なのだが、限度という物をコウは理解して貰いたい。

「う……………」

ピクピクと痙攣を起こしながらタクトはベットから転げ落ちる。彼が転げ落ちるさまを、空中からぱたと翼を動かし、飛びながら見たコウはやっとかため息をついた。

「いい加減私に起こして貰うな。いつもの時間になったらさっさと起きる！」

「……………今何時？」

「ちょうど朝日が昇ったところだ」

「……………盛大に考えたら、遅すぎだよ……………」

落ちた姿勢からゆっくりと半身を起こし、寝ぼけ眼でタクトはコウに聞いた。まだ眠いのだろう、言っていることがめちゃくちゃである。また、少しばかり覚醒しそのことに気づいたのか、後半は首を傾げて言っていた。

タクトの眠たそうな声を聞き、コウは呪文を唱えた。

浮かび上がる魔法陣は半透明。つまり、詠唱系の魔術を行使するのだろう。実際、魔術をかけるまでの時間が長めである。

「はっ！」

気合いの入った一言と共に、陣から光があふれ出す。あふれ出した光に触れ、タクトは急速に覚醒していく。

目を見開き何度か瞬き。頭をぶんぶんと横に振ってその場にさっと立ち上がる。手を後ろに伸ばし、伸びをした後、コウに「いちゃもんを付けた。」

「あのさ、コウ。起こすとき、術を使うのやめてくれない？」

「とは言え、実力行使でないと起きないだろう、お前」

「う……それはそうなんだけど」

頭の後ろをポリポリとかきつつ、うーんと唸って彼は顔を伏せた。と言うか、第三者からしてみれば、朝日が昇ったと同時に起こされる方を非難するべきだと思うが。しかも今日は学園の休校日である。そちらの方は気にならないのか、と言えばそうなのだ。

「出来れば、今度からはなるべく優しめに起こしてよ」

「今日のアレも、優しめだったのだが……」

「アレが！？ アレが優しめ！？」

などと動きやすい私服に着替えながらコウと会話し、タクトは自室

を出た。

まだ朝日が昇ったばかりのこの時間帯には人っ子一人おらず、シーンとしている。そこをタクトとコウはなるべく音を立てずに通り過ぎ、エレベーターを使い一番下の階の玄関ホールに降り立ち、外に出た。

向かう先は寮の近くにある森。その少し奥に、木が生えていない開けたスペースがある。彼はだいたい週三のペースでそこに行き、一人修練をしていた。

理由は簡単。霊印流の修練と、魔力制御の訓練。そのどちらも、彼の弱点を補うからだ。彼の最大の欠点、不応症候群。これにより、タクトは属性変化術、詠唱魔術どちらも使うことは出来ない。だからこそ、使える物はなんでも使う。

魔術の基本となり基礎となる魔力。そして、詠唱がまったく必要ない精霊魔術。幸い、霊印流の基礎は、魔力だけでこと足りる。そのほとんどが、魔力による部分強化なのだから。

だが、魔力の方はそうも行かない。

部分強化というのはどこを、どの程度強化するのか中々難しいのだ。いくら魔力を生成する魔力炉が半永久機関といえども、その人個人が一度に扱える魔力量は決まっている。故に、同じ魔力量だと全身強化と部分強化では、部分強化の方が強く強化できるのだ。

「集中を切らすなよ」

「わかってる」

目を閉じ、タクトは例の開けたスペースの中心に立ち、一つの大きな石を両手で抱え込むように持っている。いや、持って”いた”。いま、その石はタクトの手から数センチ浮いたところで止まっている。タクトは相変わらず目を閉じたまま、汗を流している。

するとコウが近くにやって来て、タクトの手と石の間の隙間をじっと見つめる。

「……三ミリ上がっているな。下げてみる」
「……っ……」

三ミリ。すさまじく細かい。が、これが出来なければならないのだ。彼らが行っている修練。それはある石を同じ一定距離を保ったままずっと浮かしているという、中々困難な修練である。ずっとそのまま、というのは、簡単そうで実はかなり難しい。

ちなみに石が浮いているのは、彼が魔力をその石に流し込んだせいだ。魔力というのは、ホントに応用が利く。

魔力はイメージで動く、とある。それは間違っていない。属性変化術で生み出した物が形を取るのには、本人のイメージによって魔力がその通りに動いたからである。

だから、魔力制御などは甘く見られがちなのだ。やる意味がないと言う理由で。

しかし、これを極めれば呼吸のように魔力を扱うことが出来るのだ。現にタクトは今、精密な動きをなしにすればほぼ無意識のうちに魔力を扱うことが出来る。

これは霊印流においてはかなり重要な要素である。タクトに霊印流を教えた彼の叔父は、そのことにおいてはとても褒めていた。そのせいか、彼は霊印流の基礎である五つの太刀を最年少で使いこなせるようになっている。

「よし、もう良いぞ」

言われた通り三ミリさげ、さらに数分後、コウから終了の声がかかった。

するとタクトは、浮いたままの石に籠もっている魔力を、そのまま上に上げた。当然、それに引っ張られる形でその石も急上昇する。十数メートル上がったところで一旦停止させ、タクトは刀を抜いた。

抜くと同時に、石に籠もった魔力を破裂させる。すると――

――バン――

上空で石が砕け、大小様々な破片が真下に降り注ぐ。そしてその真下には当然、刀を抜き払ったタクトがいる。

「霊印流参之太刀、瞬牙」

眩き、片手で構えた刀で、タクトは降り注ぐ全ての破片に一太刀ずつ与える。風切り音が間に合わない音速超えの斬撃は、難なくその全てをはじき飛ばした。

「お見事」

それを見ていたコウは、ぱたぱたと飛んできてタクトの肩に止まる。一方刀を振り切った姿勢で静止していた彼は、ふうと息を吐くと刀をだらりと下げた。

「アレをやった後にこれをやると、結構きついね、相変わらず」

流れ落ちる汗をぬぐいながら左手でぬぐいながら、はじき飛ばした破片に目をやった。何となくそのまま眺めていたが、いきなり右の方から拍手が聞こえてきた。

「いや、朝っぱらからご苦労さん。良い運動ではないか、うん」

その軽そうな声を聞いて、タクトはぱつとそちらの方を向いた。そこにいたのは、見事な赤毛をしたいかにも軽そうな男がいる。

彼は知らない。その人こそが、この学園の会長を務めていることに。

そして人知れず、”学園最強”と言うつ二つ名を持っていることに
！。
彼はまだ、知らなかった。

第13話 早朝の訓練 ②

その人はいかにも遊び人、と言った感じの人だった。制服を思いっきり改造し、コート風の上着を着ていて、袖の部分には金の刺繍が入っている。燃えるような真っ赤な赤毛は軽くツンツンに立たせており、顔立ちとも相まってそれなりにかっこよく見えた。

「しかしまあ、こんな早くから朝練か。物好きだな。お前も」

「――少々性格に残念そうなところがあるが。軽薄笑いを浮かべ、へらへら笑う赤毛の彼にそんな感情を抱き――すぐに首を振って追い出した。」

「ええっと……誰ですか？」

「おいおい忘れちゃったの？ 入学式の時にホールの壇上で新入生に挨拶していたんだぞ」

入学式の時に壇上で挨拶した――と言うことは生徒会長か。

（……あれ？ 生徒会長、こんな人だっけ？）

（違うはずだぞ。会長は確か、眼鏡をかけた大人しそうな少年だったと思うが）

精霊と精霊使いにある特別な絆を使ってコウと話し込み、思わず目を細め、疑うような眼差しで彼を見たからだろう、彼は心底憤慨したと言っ表情で、

「あ、疑っているな？ もう一度言っけど、俺は正真正銘生徒会長だ！」

「新人生挨拶の時は違う人が挨拶してましたが」

両手を腰に当て、堂々と胸を張って答える彼に百パーセント猜疑心の籠もった目で彼を射貫く。すると彼はへんと鼻を鳴らし、

「その時は仕事でちよつと出られなかったんだ。彼はその時の代理。ちなみに、奴は副会長ぞ」

「なんかうさんくさいですね。どんな仕事だったんですか？」

「ふむ、ちよつと遠出して高いところで光合成してた！」

「人間は光合成しませんよ。……要するにサボリですね」

完全にあきれ果てた表情のため息をつき、タクトは刀を一度ビュンと振り、陣に納めた。

高いところと言うのは、どうせどこかの屋上だろう。肩に止まっているコウモ、おそらく内心呆れているだろう。

あったことはないが、生徒会には心底同情する。こんな人が会長とは、世も末である。

ふと時計に目をやると、朝食の時間が迫ってきていた。タクトは慌てて生徒会の会長と名乗っている人に頭を下げ、その場を後にする。

「じゃあこれで失礼します。えっと……」

「あ、名乗ってなかったな。ギリだ。ギリ・マーク。以後お見知り、桐生タクト君」

「え……」

軽い感じで名前を言われ、彼の言葉にタクトは足を止め立ちすくんだ。その表情は驚きに染まり、目を大きく開けている。自分は名乗った覚えはない。なのに何故、彼は――。

鼻歌を歌いながらそそくさとその場を後にするギリの背中を見ながら、タクトはそのまま彼の背中を見続けた。

~~~~~

部屋に戻り、備え付けのシャワー室でかいた汗を流しつつ、タクトは先程の彼のことを思っていたが。途中でやめた。

せっかくの休日、このまま変な考え事をして過ごしたくはない。さつさと頭を切り換えることにする。

シャワー室から上がり、ぬれた髪をタオルで注意しながら拭き、私服に着替えて部屋を出る。目指すはエネルギー補充、朝食を取るために食堂へ向かう。

「……そう言えばマモル、起きてるかな？」

ふと心配に思ったので、寄り道してマモルの部屋に行こうかなと思つたが、いらない心配だった。

「……それ！」

「うあ!？」

突然後ろから背中を思い切り叩かれ、彼は前によろめいた。体勢を何とか整え、叩いた人物、マモルに目をやった。

「おはようさん!!」

片手を上げ、めちやくちゃ清々しい笑顔で朝の挨拶をするマモルにタクトはキッと睨め付け、

「いきなり何するんだよ、痛いだろ！」

「お、ワリイ。でも、朝の挨拶はしてくんねえの？」

両手の指先をツンツンと合わせつつ、捨てられた子犬のような目をするマモル。自分より背の高い彼がやると、正直、気持ち悪い。げんなりとして、タクトはため息をつき、とりあえず挨拶をする。

「……おはよう」

「何だよ、朝っぱらからテンション低いな。ほら、さっさと食堂へ行こうぜ」

ため息をつき、マモルに促されるままにタクトは食堂へと足に向けた。

## 第14話 お出かけ（前書き）

一週間ぶり……。一週間ぶりですよ、更新。

遅れてすいませんでした……

## 第14話 お出かけ

食堂につき、朝食を取ったタクト達は（二人とも和食）、レナとコルダが座って談笑している席を見つけた。どうやらあの二人、とても仲良くなったみたいだ。ちなみに、彼女らは洋食である。彼女らに近づき、マモルが「よっ」と声をかける。

「おはようさん。昨日は良く眠れたか？」

「あ、フジ。おはよう。私はちよつと眠いかな」

「だから俺はマモルって……。まあいいや」

諦めたふうに息を吐いた彼に、タクトは苦笑いを浮かべて彼の背中を叩いた。

「まあ気を落とすな？ あだ名の一つや二つ、気にすることはないよ」

「そーそー。あだ名があつた方が親しみを持ちやすいんだから」

「コルダ、もしかして狙ってやってる？」

朗らかに笑う彼女を見て、レナも苦笑いを浮かべながらそう指摘する。コルダはニッコリと笑い、

「うん。まあフジはフジだし。そっちの方が言い慣れたから諦めてね」

ガクツと頭たれたマモルを見て、三人は笑い声を上げた。笑っている三人を恨めしそうに睨み、マモルはへんつと鼻を鳴らす。

「お前らな……そう言えば、今日の休日何かやるのか？」

と、急に何かを思い出したのかハツとした表情で三人に問いかけた。

「いや、特にないよ。あまりにも暇だったらどこかに出かけようか  
と思っっているけど」

「うーん、あたしもないかな。コルダは？」

「私は……うん、ないや。タクト、どこか行くんなら私も行っ  
ていい？」

箸を動かしながらご飯を食べるタクトの「どこか行く」発言に、コ  
ルダが食いついた。レナも、

「だったら、後で街の方に行かない？ あそこ、色々ありそうだか  
ら面白そうだし」

と、彼女も行く気満々である。

タクトは二人の返事を聞き、じゃあ行くかなと頷きかけー肝心の  
話題を振った男が完全スルーされていることに気づいた。不機嫌そ  
うに顔を歪ませるマモルに彼は恐る恐る声をかけた。

「えっと、マモル？ 何だったらマモルも……」

「行くに決まっているだろ！ てか俺もどこか行こうって誘おうを  
思ってたんだぞ！」

（拗ねてる……）

付き合いの長い二人は彼の叫びを聞いてそう思い、何となく情けな  
く思った。この男、いい年扱いてどこか幼稚なところがあるのだ。  
そうなったら適当に流しておれば良い。

「はいはい、わかったから。とにかく今はご飯を食べようよ」  
「タクトお前……」

よって例の如く適当に流しておいたが、当のマモルからジロツと睨まれた。声音も、不快感丸出しである。

それをスルーして、タクトは涼しい顔で食事を続けている。レナはその光景に慣れっこなのだが、コルダの方はそうでもない。今にも喧嘩になりそうな雰囲気をかもし出しているマモルを見て、おろおろする。

「コルダ、大丈夫だよ。ああ見えても、喧嘩とかにはならないから」  
「んーそうかな。フジ、不細工な顔やめて、とりあえずご飯食べよ！」

「おい！」

大爆笑。タクトとレナは彼女の発言を聞いて、大きく笑い出した。幸い、食堂はがやがやと騒がしいので注目を集めることはなかった。コルダの脳天気も、ここまで来れば精神年齢はいくつなのかと思いたくなる。笑っている二人をマモルはジロツと睨んだ。

「何が面白いんだよ！」

「い、いや、だって……」

「そ、そうだよ、ね……？」

よほど面白かったのか、二人とも息も切れ切れにそう呟いた。

「ね、ご飯食べないの？」

コルダの発言。こうなった非は彼女にあるのに、全くの無関心。その自由人度に、ホントに精神年齢はいくつなのかと再びタクトは思

った。

~~~~~

その後、四人は待ち合わせにしておいた寮の前に集合し、そのまま街へ出かけることとなった。

フェルアント首都、リアルト。行き交う人々はとても多く、あたりは喧噪に包まれている。様々な世界との交流を持つフェルアントは、それぞれの世界の特産品を輸出入しており、リアルトにはそれが多く出回っている。だが、それは精霊のことを一般的に知っている世界に限ってである。つまりは、三人の故郷である地球産のものは出回っていない。

「ねえ、三人の故郷の……地球だっけ？そこって確か、精霊文化ないんだよね？」

街に繰り出し、リアルトのメインストリートを歩いているときにコルダが聞いてきた。

「うん、そうだけど？」

「じゃあさ、どうして三人は精霊と契約を結ぶことが出来たの？」

彼女の疑問に、タクトはため息をついて苦笑をする。

「アキラって名前に、聞き覚えはない？」

「？それはもちろんあるけど……」

彼女の問いに朗らかに答えながら頭をかき始める。

「桐生—アキラ（彰）って言うんだけど。僕、その人の甥っ子なん

だ」

タクトの答えに、コルダは目をぱちくりさせて硬直した。目を何度
も瞬かせ、必死に彼の言葉を飲み込もうとする。

「桐生……ア、アキラって……。じよ、冗談、だよね……？」

「コルダ、大変遺憾ながら、本当だ」

「何が遺憾なんだよ……」

ふうつと再度ため息をつき、タクトはそう呟いた。マモルとのやり
とりを聞き、コルダはようやくいつもの笑顔を見せた。――若干、
引きつってはいるが。

桐生アキラ。いや、アキラの方が。少なくとも、このフェルア
ントでその名を知らぬ者はいない。

十五年前、フェルアントで起こった改革。その功労者であり、そし
て数少ないランク一位（最上級）の一人である。

当時フェルアントでは非人道的な研究を行っていたことがあり、ま
た、政府もそれを黙認していた。研究についての詳細は省くが、そ
れによって多くの命が奪われてしまい、それを変えようと立ち上が
った一人が彼なのだ。

政府や当時のランク一位、そしてフェルアントの持つ最強部隊とう
たわれた軍勢とも立ち向かい、見事勝利。フェルアントそのものを
変えることが出来たのだ。

彼の強さは”異常”とも呼べる物があり、同じランク一位でも頭一
つ飛び抜けた実力を持っている。また、今現在彼はフェルアント地
球支部の支部長を務めている。

以上のことを話し――とは言え彼女も知っている事柄を多く含んで
いるが――話し、これでわかったでしょ、とばかりに言った。

「簡単に言つと、僕は血筋で、マモルと……後レナも僕が精霊を使っているのを見てね。偶然、二人とも素質があつたから、それで」

そう言つて何となくレナに目配せする。すると彼女はにこつと笑いわかつたとばかりに頷いた。

「……タクトつて……ボンボンだつたんだ……」

コルダの呟きに、タクトはあははは……と乾いた笑い声をあげ、

「あまり、触れ回らないように。僕も、親の七光りなんて言われたくないしね」

「ふゝん、大変なんだね、タクトも」

「それにコイツは病を患つてるしな。おかげで色々大変だよつつつ！」

マモルがケタケタ笑いながらいい、その隣にいるレナが彼の足を踏みつけた。足を押さえ悶絶する彼には目もくれず、コルダはえつと驚きの声を上げ、

「タクトつて、病気なの!？」

「病氣つて言えば病氣だけど……。でも大丈夫だよ。大した物じゃないし」

(……十分大したものだと思うがな)

自分の中にいるコウがやれやれ、とばかりにため息をついたのを感じ取り、うつと痛いところを突かれたと思つた。

確かに不反応症候群は厄介極まりない病気だが、今まで何とかやつてこれたのだ。もう慣れたので、と言うか、術式を使ったことがな

いので何が厄介なのかいまいちピンとこない。それに、

『……やはり、あいつの子だな』

自分がそれになったと聞いたときの、叔父の言葉がひどく心に残っている。

第15話 潜む力（前書き）

うゝむ、スランプ気味だなあ……

第15話 潜む力

時間をやや遡って、とある異世界。フェルアントとも同盟を結ぶ、世界間交流のある世界だ。今そこで、厄介な事が起きていた。

その世界の名は「プーリア」。たくさんの自然に恵まれた、豊かなところである。自然に恵まれているため、その世界全体で見渡すと数百もある森、その内の一つで事は起こっていた。

その世界に住む民族衣装を着た青年は、森の中を走っていた。ぜえぜえと息を乱し、一心不乱に。いや、その走りは逃げるといのが正解か。

後ろを向いて、何かを見るなり再び走るスピードを上げる。しかし、長い時間ずっと走り続ける彼には、それすらとても過酷な物だった。

「はあ……はあ……。……くそ、まだ追ってくる！」

息を乱しながらそう吐き捨て、顔をしかめながら走り続ける。何せ、そうしなければならぬ。そうしなければ死ぬと、理屈ではなく本能でそう悟ったからである。

青年が逃げている物……。それを一言で言うならば、獅子の形をした異形……。彼はそう”思った”。

思った、と言うのは、彼はそれを見ていないのだ。この森は薄暗く、走り続ける彼には長年、この森で暮らしたことによって得られた方向感覚。それを頼りにひたすら逃げ続けているのだ。

――幸いである。もし彼がそれをしかと見たら腰を抜かしたであろう。それは、災いをばらまく――

「あつ！」

突如、青年が石に躓きバタリと転んだ。派手に転んだ彼は、すぐさま起き上がり走り出そうとするが――足が悲鳴を上げた。もう限界だと訴えているその足は、まるで鉛のように重たく動かない。半身を起こしてすぐさま足をさするが、その隙に異形は一気に青年に詰め寄り、そして彼は見た。今まで自分を追いかけて回っていたのは何だったのかを。

「え……」

驚愕に見開かれたその目には、恐怖は映ってはいなかった。人間、あまりにも驚くと、何も出来なくなるのだ。

異形は、その大きな口をガバツと開け、彼を一飲みにと――

――突如、風が吹いた――

横手から吹いたその風は、暴風と化し、異形を青年から吹き飛ばす。風にあおられた異形は、すぐさま体を起こし、ギイツと風が吹いた方を睨むが、すぐさま異変が起こった。

再び風が吹き、それと同時に異形が切り刻まれた。

全身に線が走り、そこから異形の体液――おそらく血の類いだろう――が吹き上がり、それが大地を染める。

「な……何が……」

何が起こったんだ。それさえも口に出せず、ただただ青年は、その様子を見ることしか出来なかった。

~~~~~

「危ねえ危ねえ。あと少し遅れたら、あっちの方がやばかったな」

青年が驚きながらも何も出来ずにいるのを、森の中から一人の男が見ていた。突き出し、向けていた手のひらを戻すと、二十代後半の彼は、背後から感じる一つの視線にうんざりする。

「……………」

「……………わかった、勝手な行動は慎みますって」

「信用できるかドアホ」

背後から感じる視線――宙に浮かぶ精霊の視線を感じ取りながら、  
「そんなに信用ないかね？」と呟く。精霊からしてみれば、当たり前だ、と一喝するのだが。  
ふうつとため息をつきつつ、

「とりあえず、連中から依頼された物は終わったよな」

「ああ。これでお役目ごめんだろう。しかし……………」

「気づいてる。どうやら連中の何人かは気づいてるみたいだが……………」

そう呟くが、どこか心配そうな表情を浮かべ、男は頭をガリガリとかく。

「……………あの無能連中だ。事の重要性に気づいていないのが大半」

「状況によっては、あの人に動いて貰うしかなかろう」

そうだけだよ、と唸りつつ、彼らは何となく異形を退治した地点を見やる。どうやらあの青年は、倒れた異形が何なのかを青白い顔で確認している。

それを見ながら鳥の姿をしている精霊は、

「……………こんな田舎でも、伝説は伝わっているみたいだな……………」

「？」

その呟きに彼は眉根を寄せ、何なのかを聞こうとする。が、精霊は首を振り、

「たいしたことではない。それより、戻らなくていいのか？」  
「げっ……」

嫌なことを思い出した、とでも言うように、露骨に顔をしかめる彼はふうつとため息をつき、

「そうだな、戻るか……。しかし、遠路はるばるこんなところに来たんだ。少しは遊んでも……」

「三百六十度森の中で、どう遊ぶ気だ」

「い、いや、首都あたりに行けば……」

「お前自身の立場を考える。首都に行ったら、強制送還だ」

四方八方塞がれたその言い分に、彼は沈黙せざるを得なかった。素直に「はい……」と呟き、フェルアントに戻るための転移魔術を使用する。

足下に展開された魔法陣が点滅し、消えると共に光に包まれ、彼は転移した。

## 第16話 休日の過ごし方

「……………」  
「……………」

男二人ータクトとマモルは無言で目の前を行く二人の後を付いていく。その両腕には決して多くはない量の買い物袋、その数々があつた。女性と買い物に付き合つと、男達は必ずと言って良いほど荷物持ちをさせられる。

と言つのも、二人は別段何かほしい物があつて街に出たのではなく、ただ何があるのかなと思ひ散策に出たので、荷物持ちをさせられても一向に構わないのだが。しかし、二人はなめていた。女性の買い物の、その長さを量に。

二人はその良い例であり、また、人は疲れてくるとだんだん口数が少なくなる。いろんな店をのぞき込み、品物を指さしながら喋っている二人ーレナとコルダを見やり、タクトははあゝとため息をついた。

「ねえマモル……………」  
「ん」

疲れている故か、口数が少ないマモルの返答に苦笑しつつも、

「平和だね」  
「……………今までも平和だっただろ」

呆れた風に応え、マモルはタクトの方を見やる。彼の方が背が低いので、自然と見下ろす感じとなる。

「いや、なんか現実逃避したくてさ」

「……………」

それはわかる、と何度も無言で頷く彼を見て、タクトはホツとする。

「女の子って、何でこんなに買い物長いんだろうね？」

「俺が知るか」

吐き捨てるように言い、マモルは前にいる二人に目をやった。二人は店にある品物―特にアクセサリー類を見ている。じっと見つめている二人を見て、マモルは不思議に思い、彼女らに近づき、それに気づいたタクトもまた後を追う。

「何見てるの？」

真剣な表情でアクセサリーをじっと見やる二人に問いかけると、コルダが振り向き、

「二人にプレゼント。何か、これが良いって言うのない？」

そう返してきた。

「プレゼント？何で」

「今まで荷物持ちしてくれたから、そのお礼だよ」

レナが振り返るなりそう言って、手に持つ何かを見せてきた。

「タクト。これはどう？」

見せてきたのは、赤い翼を型取ったアクセサリ。それを見て、タクトはフツと笑う。

「コウのことも表してるの？」

「それは考えてなかったけど、確かにそう見えるね」

ははつと軽く笑いながら言い、タクトは一つ頷いて、

「良いと思うよ。思い出深いしね、赤い翼って」

と、そう答えた。その答えに満足したのが、レナは一つ頷くとマモルの方を向いてそれを見せた。

「マモルはこれ。良いと思わない？」

にこつと笑いながら見せてきたそれは、一見四角いプレートのような物。中央に剣を型取った穴が開いている。おおーっと感嘆の意を示しながらマモルはニツと笑う。

「良いじゃん良いじゃん。かっこいいな、それ」

それを聞いてレナは笑顔で、

「じゃあこれにするね。ちょっと待ってて」

と言うと、それを店の人に差し出し、会計を済ませる。その間にコルダは、無言であるものを見つめていた。

「……………」

「？ コルダ、どうしたの？」

その様子に気づいたタクトが、そう聞くと彼女は珍し事をした。いつもの笑顔に似合わず、どこか悲痛で、儚い笑みを浮かべたのだ。思わず眉をひそめるタクトに気づかず、彼女は、

「……やっぱし、捨てられないよね……」

誰にも聞こえない程の小さな声でそう言い、数あるアクセサリーの中から一つを手取る。それは木を編んで作った、何かのレリーフ。それに思ふところがあるのか、彼女はずっと見続けている。

「……コルダ？」

タクトの呼び声に、やっと反応した彼女は慌ててそれを元に戻し、

「あ、な、何？」

そう言っただけいつもの笑顔を浮かべた。その様子にタクトは首を傾げ、

「いや、何かそれを持っただけ……。それ、ほしいの？」

「ううん、そうじゃないの。これ、昔持ってたことがあって、思わず懐かしいな〜って」

はははっと笑いながら言う彼女に、へえ〜と返すと、その脇からマモルの腕が伸びてきた。それに気づき、思わず彼の方を向くタクトは、マモルが手に取った物——先程コルダが持っていたレリーフ——を見て、

「どうしたの？」

「いや、これ……。どっかで見たような……」

マモルが口に出したその言葉。それを聞いて、コルダは心臓がドキ  
ンと跳ね上がるのを感じた。

（もしかして……）

まずいーそう思ったが、その思いはすぐに消えた。

「うーん……気のせいかな？」

首を傾げながら言う彼を見て、ひとまずホッと息を吐く。と、そこ  
でちょうど良く、

「何してるの、三人とも？」

と、会計を終え、手に小さな袋を二つ持つレナの声が響いた。

「いや、何でもない」

彼女のかけた声にそう返し、マモルは手に持っていたレリーフを元  
の場所に戻した。そして彼女の方を向いて、

「そう言えばそれ、結構高かったんじゃないのか？」

「大丈夫だよ。意外と値段はしなかったし」

そう言つて、それぞれの袋をタクトとマモルに渡してきた。それぞ  
れ受け取ると、タクトは、

「ちなみに幾らしたの？」

「二つ合わせて20アン。値段の割には良い見栄えするよね？」

「え、それだけ!？」

値段を聞いて、おおっと声を上げた。20アンと言うことは、円に直すのだいたい四百円ぐらい。あの出来栄えなら確かに、四百円は結構なお得である。

そう言っていると、レナはコルダの方を向き、

「じゃあ、お買い物を再開しようか？」

「賛成!」

彼女の声に重なるようにコルダが勢いよく手を上げ、歓声を上げる。それと同時に、男達二人は心の中で違う意味の歓声を上げる。

(ええ、まだ!?)

(女の買い物つてのは、ここまで時間のかかる物なのか!?)

歓声と言うよりは悲鳴か。先程、お礼としてアクセサリーを買って貰ったので、これで終わりだと思っていた二人は、開いた口がふさがらない状態になってしまった。

「さ、行こう行こう」

「あ、待ってよコルダ」

上機嫌に、そして傍目からは幼すぎる精神年齢をしている彼女に追いつこうと、レナは急ぎ足で近寄る。その後ろから、男達は(一人は少女みたいな顔立ちをしているが)ふうつとため息をつき、今日という休日を潰すことにする。

## 第17話 歴史の狭間で

翌日――

フェルアント本部にて、一つの騒ぎが起こっていた。

元々フェルアントというのは、フェルリット精霊使いを束ねる組織であり、その世界の名をそのまま使っているのだ。つまりここで言うフェルアントというのは組織の方であり、その本部での騒ぎと言うことである。現在本部――と言うか本部長がいる部屋の中で、たった今帰ってきた精霊使いの報告を聞いているところだった。

「――なるほど。どうやら、封印が解かれ始めているようだな」

「ええ、多分。今までの兆候から察するに、その可能性が高いかと」

フェルアント本部長にそう若干崩れた敬語で話すのは、先程プーリアから帰還してきたあの男である。二十代後半である彼は、青い短髪をした頭をかき、ふうつとため息をついた。

「ですが、流石に俺一人だと調査に限度がありますよ。何とかならないんすか？」

「そうばやくな。私とて何とかしたいのだが、例の支部長達がな」

「……またすつか。奴らも懲りませんね」

それを聞いて呆れた――と言うか若干感心したのか、やれやれと言ったふう<sup>に</sup>に首を振る彼はそうばやく。本部長は、その支部長達とのやりとりを思い出し、

「まったく……地位に就くというのは、因果な物だな。こつも身動きが出来ないとは」

と、忌々しげに言い放つ。それを聞き、男は顔を引きつらせた。

「い、いや、確かにアンタが動いたら奴らも黙るでしょうけど……。ですが、そうしたら奴らも中立であるアキラさんに泣きつくんでは？」

「アキラは泣きつかれても動かんだろう。元々奴らは私やアキラ、そしてお前さん達をただの駒としか見てないからな。おそらく蹴飛ばすだろうよ」

その時の様子を想像したのか、お互い顔をにやつかせ、クツクツクツと含み笑いを漏らす。

「そうでしょうね。まあ良いでしょう、最悪、学園に頼んで何とかしてみます」

「……ホントに最悪だな。……こうなったらいつぞ、”マスターリット”の募集をかけてみたら……」

本部長は難しい表情を浮かべ、そう提案するが、ものの2秒で却下された。

「いやいやいや、俺ら一応暗部の人間ですからね。そう言ったことを公の場するのは……」

「そう言えばそうか……。すまん、配慮が足りなかったな」

本部長はそう言って頭を下げたが、逆に慌てたのは男の方である。

「いや、気にすることないですよ！　と言つか頭を上げて下さいよ」

男のその一言で本部長は頭を上げたが、それでもやはり何か思うところがあるのか、思案顔で何かを思い詰めていた。それを見て、男

は、

「……どうかしましたか？」

「いや、何でもない」

首を振りつつそう言ったが、やはり何かを考えたままなのは変わらない。

「……まあいい。それよりも、厄介な”神器”が目覚めた物だな」  
「ええ、全くです」

考え事をいったんやめ、そう呟く。神器――それが何を意味しているのか知っている二人は、そろってため息をついた。

「ここであべつていても仕方がない。よろしく頼むぞ、”マスター  
リット”リーダー、アンネル・ブレイス」

「ま、仮のリーダーですけどね。頼まりました」

そう言つて男――アンネルは茶目つ氣たつぷりに言つと、そのままその部屋を後にした。

~~~~~

数日後。

休みが終わり、学園では授業を行っていた。

学園で行う授業はたくさんあり、それらは必ず受けなければならな
いと言ふ事はない。と言ふか、その全てを受けていたら卒業が遙か
彼方になってしまうらしい。

そのため、長い学園の歴史のなかで、すべてを受けて卒業した者は
皆無である。

それほどの授業量を誇る学園でも、授業の人気に差が出てしまう。それは精霊使いの元々の役割に縛られてしまうからである。と言うのも、元々精霊使いというのは、一言で言うと戦士だからである。

「……歴史の授業ってここ？」

「ああ、多分な」

ある教室の前でタクトと、彼の肩に止まっているコウが会話をしていた。タクトはその答えを聞くと、躊躇なく扉を開ける。

今日の授業には、いつものメンバーはいない。なので、適当に話し込んでいる輪の中に入っていこうかなと思っていたが。

「……………へっ？」

「ほう……………」

扉を開けて、二人は思わず声を出した。その教室には誰もいない。

「ええっと……………間違えたりしたかな、僕？」

「いや、教室を間違えたりとか、日時を間違えたりとかはない。……………どう言うことだ？」

タクトよりも聡いコウは、周りを見渡して冷静に分析する。しかし、何もない。

「……………これは……………帰った方がいいかな？」

「いや、ダメだろう」

呆れた風に言うコウの言葉を引き継いだ。

「そうですね、まだ授業は始まってないんですから」

「うわぁ!？」

「なっ……!？」

それも、後ろから。

いきなりのことに、二人は慌てて後ろを振り向く。するとそこには、栗色の髪を一つにまとめた、所謂ポニーテールの女性がそこにいた。彼女はニツコリと笑うと、

「珍しいですね、歴史の授業でこんなに早く来る生徒さんは。新入生ですか？」

「え、ええ、そうですけど……。あれ？」

「? どうかしましたか？」

彼女の問いかけにタクトは果然としながらそう答え、その後すぐに首を傾げた。

（この人、どこかで会ったような？）

記憶の中に引つかかる物があり、タクトはそれを思い出そうと必死になる。

「あの? どうしたんですか？」

「何をほおけているんだ？」

女性とコウ、両方から言われ、タクトはようやく我に返った。

「わ! ごめんコウ!」

「……コウ？」

何かに反応したのか、女性はコウの名を呟き、ふと何かを考える仕

草をする。

「コウ、コウ……。あ、もしかしてアナタ、桐生君!？」

思い出したかのように言う女性の言葉に、タクトはいと頷いた。

「えっと……。僕ってそんなに有名ですか？」

「まあ、入学早々決闘騒ぎなど起こせば有名になるわ」

コウの言葉に、それもそうか、と納得しかけたが、女性はクスリと笑いそれを否定した。

「いいえ、違いますよ。まあ確かにそれもあるんですが……。その辺は、彼と似ていますね」

「彼? ……もしかして、セイヤですか？」

若干思い当たる節があり、タクトはそう聞き返す。すると女性は頷き、

「ええ、そうですよ。そう言えば自己紹介がまだでしたね。フェルアント学園教師、西村アヤカ。二十歳になったばかりの、ぴちぴちの独身です」

「いや、聞いてない」

その女性――西村アヤカの自己紹介に、コウがぴしゃりと言っていた。

第17話 歴史の狭間で 〰〰 (前書き)

更新するまで時間がかかり、申し訳ありませんでした(土下座

最低週一更新をしたかったのですが……。……あれ、そう言えばタ
グのところに不定期更新という言葉が(殴

第17話 歴史の狭間で ㄱ2ㄱ

「やっぱし地球出身ですか。そう言えば、何度かあそこに来ていたのを見た覚えがあります」

コウの首をギュウツと締め、冷や汗を流しながらタクトはそう尋ねた。

「はい、あそこは支部ですから。色々と用事で」

おそらくその時に見かけたのだろう。やっと思い出した。と言う事は、義理の従兄であるセイヤとも、その時に知り合ったか。

「あの時に何度か見かけましたが、やはり可愛いですね桐生君。とてもあの人の従弟とは思えませんよ」

「それはどうも。と言うか、男に可愛いって褒め言葉じゃないですよ」

内心複雑な思いでそう言い、苦笑いを浮かべながらコウを離す。ケホケホと息を吐き、コウは首を左右に振った。

（何をするんだ!?!）

（当たり前だろう! もう少し言い方を考えてよ!）

冷や汗を流しただろう、とコウに文句を言い、それが効いたのかむう……と唸りながら沈黙し、まるで逃げるかのようにタクトの中へ戻っていく。と、ちょうどその時を見計らったかのようにチャイムがなり始めた。

「あ、チャームがなりましたね。席について下さい」

「……というか、僕以外来ていませんよ？」

「大丈夫ですよ。このクラスの生徒は、皆さん時間ぎりぎりで来るので」

ニツコリと笑いながらそう言う西村。しかし、それはそれで問題ではなからうか。タクトが疑問に思っていると。

『遅れました！！』

数人の生徒達――おそらく歴史学科の、だろう。彼らは教室に雪崩の如く入り込むと、そのまま流れるような動きでそれぞれ席に着いた。

「……………」

いかにも慣れているような動きとその光景に、顔を引きつらせながら見たすタクトは、すさまじい不安が募るのであった。

「えーっと……桐生君も座った方が良いのでは？」

「……そうします」

突っ込む気力もないのか、タクトはふうつとため息をつきながら席に着いた。周りを見渡し、人数を確認してみる。合計十人もいない、自分も入れ九人。その内二人はクラスで見かけたことがある顔だが、残りの四人は見たことがない顔で、残りの一人はどこかで見た気がする女子生徒であった。そしてもう一人。

（何で、あの人が……？）

そこにいたのは、生徒会会長と名乗っていたギリ・マーク。あの赤毛はそうそう見忘れるはずがない。と、タクトはそこで、

（そう言えば、僕のこと何で知っているのかな？）

以前浮かんだ疑問が再び浮かんだが、その質問は後にしようと心に決める。偶然同じ授業に出ることになったのだ。質問しようと思えばいつでも出来る。

ーと言うか、何で先輩達がいるんだ？

遅播きながらもその事実気づき、不思議に思っ て見ていると、

「まず、今日は新入生がいるので自己紹介からですね。私の名前は西村アヤカと言います」

そう言っ てぺこりと頭を下げる西村。すると男子生徒ーあのギリであるーが、

「俺達も自己紹介すんのー？」

と、うすら笑いを浮かべながら敬語も付けずにそう言い放った。恐ろしくフレンドリーな態度に、思わず同じ一年達は啞然とする。西村はそれに対し、

「いえいえ、今日は授業を進めますよ。……授業が潰れると思ったら大間違いです」

「ギクッ……いやいや、そんなこと考えているわけじゃないですか」

うつほんのちよつとだけ怯み、すぐさま何もなかったかのようにそう答えた。しかし、目線を反らしながら答えたので、全く説得力がない。すると隣に座っている、どこかで見た気がすると言った女子生徒がそれをジト目で見つめながら肘でこづく。ボソボソと何かを言い、彼は何かを諦めたように両手を挙げ、降参の意を示した。

「さて、この歴史学科、新入生達は先輩方がいるので、多少不思議に思っているので説明します」

その二人のやりとりが終わるのを待って、西村はそう切り出した。

「まず、この学科には他学年と共に歴史の授業を行います。つまり、向こう3年間は似たような内容となるわけですね」

「……はい？」

それが、その言葉を聞いたタクトの一番最初に浮かんだ言葉であった。

向こう3年間は同じ内容の授業。それはつまり、やることがないと言っ事だろうか。しかし、少し考え、彼はもしかしたら、と思った。

学園では、大量の科目があり、それにはもちろん、人気のある科目と不人気の科目がある。そしてこの歴史学科は後者に当たる。

理由は、他の学科の方が人気だからである。

少し前に言った、元来精霊使いは戦士であると言っ言葉、その言葉に関連している。せつかく精霊使いになったのだから、バンバン魔

術を使いたいと言うのが人情であり、また、役割でもある。

精霊使いというのは、各地から寄せられる情報を頼りに危険な物、生物を回収、駆除していく、言わば市民の安全を守る警察のような役割を持っているのだ。

その他の学科――体育会系のような学科が、人気を誇っているのだ。もちろん、歴史の中には知っておかなければならない物があるが、それはもう常識のような物なので大した意味はない。

そのため、この歴史学科を選ぶというのは、よほどそれが好きか、タクトのように病を持っている者、それらに分けられる。

（いや、タクト。まだいるだろう？）

（え？）

そこまで考えたタクトは、頭に響くコウの声を聞いて問い返す。あつちを向け、と言う言葉が聞こえ、それに習ってそちらの方を見やると。

「……………ぐう」

（……大物なのかな？）

（ただたんの馬鹿だろう）

授業中にもかかわらず、机に俯せになって爆睡している生徒会長を見て、タクトはあきれ果ててそのような事を思った。それをコウがぴしゃりと言いのける。

まあ、コウが言いたいことはわかった。授業のやる気がないもの――つまりサボりの人間がここに来るわけだ。しかし、そのことはあ

まり広まっていけないのか、それともギリだけがひどく不真面目なのか、サボる人間はあまりいないようだ。

（あの人が生徒会長……世も末だね……）

西村が手に持つ板——出席簿か。それで叩く様子を見て、頭が少しばかり痛くなってきたが、それを無視して授業を受けることにした。

ああ、今じゃ珍しいな（出席簿で頭を叩くこと）、等とどうでも良いことを考えながら。

第18話 生徒会長の搜索

新学期が始まって以来最初の授業故か、新しく学ぶことはなく、そして先輩達は退屈そうな表情で西村の話を聞いていた。

流石、全学年共同で学ぶだけはある。来年は自分もあんな風に退屈するのかな、等と思いながらタクトは授業は受けていた。

鐘の音が鳴り、授業の終わりを告げると、皆そそくさと荷物を整え教室を出て行く。タクトもそれにならない、教科書やら筆やらを片付けると教室を後にする。

（おい、タクト。忘れてないか）

（？ 何を？）

教室を出て数歩もしないうちにコウからそう言われ、タクトは首を傾げる。

（忘れているな……。後であの生徒会長に聞くことがあったんだろう）

「あっ」

思いだした、とでも言うように表情を変え、タクトは後ろを振り返り教室の中を見渡す。何であの生徒会長は自分のことを知っているのだろうか。おそらく、あの決闘事件のせいであろうが。

そう考えると、納得のいくことになる。生徒会長であるならば（あまり信用ならないが）、情報にも通じているはずだ。

（……よくよく考えると、変に勘ぐる事じゃなかったかな？）

うーんと悩みながらそう結論づけるが、やはり気になる。と言うか、決闘騒ぎのせいではないと、勘が働いているのだ。

（ま、聞く気になったんだし、聞いてみよう）

そう思いながら教室を見渡すが、誰もいない。生徒のほとんどが戻ってしまったようで、教室にいるのは西村と一人の女子生徒のみ。彼女は教室を見渡している彼を見やり、彼女は微笑んだ。

「桐生君どうしました？ ここにはもう誰もいないですよ？」

「そうですね。……あの、この席で寝ていた生徒会長、何処行っただか知らないですか？」

そう言いながら彼が寝ていた机のあたりに行つてそう聞いてみる。

「ああ、彼なら多分……屋上あたりじゃないですか？ ……と言うか、何で彼が生徒会長だと？」

「一度話したことがあって、その時に知ったんです。……彼が生徒会長だと、やはり苦労しているんですか？」

「ええ、ええ、まあ……」

はははつと笑いながらそう言う彼女の表情には、どこか疲れた色が見える。やはり、かなり破天荒な生徒会長様らしい。

「……お疲れ様です。じゃ僕、探しに行きますね」

「あ、待って下さい」

心からお疲れと言って、タクトは教室を出ようとしたが、それを西

村が待ったをかける。振り向き、何ですかと問いかけると、

「セシリアさん、ここにいる桐生君も、彼を探しているみたいですよ。」

教室にいる一人残された女子生徒に西村はそう呼びかける。すると、銀髪なのか白髪なのかわからない髪色をした生徒がこちらを振り返った。

（うわぁ……）

（むう……）

タクトは彼女をポケーと見つめ、コウは感嘆の意を漏らす。顔立ちの整った人であり、かなりの美人である。

彼女はホツと息を吐くとそのままこちらまでやって来るなりタクトの方を見て、

「あなた、あの馬ーもとい、ギリを探してるの？」

「え、ええまあ。と言うか今、馬鹿って言うところでしたよね？」

「……否定はしないわ」

（……お疲れ様です）

若干諦めた感じでそう言う彼女に、西村の時と同じで同情する。そんなタクトの胸中など知ってか知らずか、

「まあいいわ。私一人だとしても手が足りないのよ……。彼を探すの、手伝ってくれる？」

その問いかけに彼は頭をかいて、

「うーん、まあいいですけど……。そんなに見つからないんですか？」

「そうなの。ギリの奴、隠れるのは超一流なのよ。おかげで生徒会でもさんざん苦労してきているんだから」

ふうつとため息をつきながら言う彼女の言葉を聞いて、タクトは首を傾げた。

「……さんざん苦労してきた？」

「ええ、私は生徒会の副会長をやっているの。……そう言えば自己紹介がまだだったわね。私の名前はセシリア。セシリア・フライヤって言うの。それで、アナタは……」

「あ、僕はタクトって言います。桐生タクト。よろしく願いしますね」

生徒会ですか……。それは大変ですね、等と思いながら頭を下げた。すると彼女は微笑みながら頷いて、

「ええ、よろしくね。もう教室にギリはいないみたいだから、とりあえず外に出ましようか」

タクトに外に出るように促すと、彼女は西村の方を向いて、

「それでは先生。また次の授業に」

「ええ、また」

微笑みながら言うセシリアに対し、西村も同様に笑いながら別れの挨拶をした。

~~~~~

「それで、何処を探します?」

「そうねえ」

歴史の授業を行った教室から出ると、二人はまずこれからの作戦を立てる。タクトはうーんと考えながら、

「コウ、出てきて」

魔法陣からコウを呼び出す。陣から出てきた赤い鳥の姿をしたコウを見て、セシリアはへーっと感想を述べる。

「不死鳥フェニックスなんだ、アナタの精霊。中々すごいのと契約を交わしたじゃない」

その褒め言葉には苦笑いを浮かべて、

「まあ、僕にはもったいない精霊ですよ」

「そう思っているのはお前だけだ。私は、お前と契約を結ぶことが出来て良かったと思っているぞ」

不死鳥ーコウからの思わぬ褒め言葉に、タクトは心がムズかゆくなるのを感じた。それに追従するかのようにセシリアも、

「そうそう。人が精霊を選ぶのではなく、精霊が人を選ぶものよ。良かったじゃない、その精霊に選ばれてさ」

そう言つてウィンクする彼女を見て、タクトは思わず見ほれてしまった。再びポケーとしたすか、それを頭上にいるコウが彼の頭を突

いて元に戻させる。

「え、ええっと。とにかく、ギリ先輩を探しましょう。上空はコウ、お願いできる?」

「ま、よからう。あの赤髪だな」

「ええ、そうよ。……それとコウ……だっけ? アナタだけで空から探すのは少し難しいんじゃない?」

セシリアのその言葉に、コウは少し悩んだが、やがて小さく頷いた。

「そうだな。この学園は広い。私だけでは何かと大変ではあるが…

…」

「やっぱし?」

彼女はそう言うと、タクトがやって見せたように魔法陣を展開させると、やがてその魔法陣から、白い小鳥——いや、ハヤブサか——が、現れる。

「アナタのように幻獣タイプの精霊じゃないけど。でもこの子、中々頭は良いわよ」

そう言いながらタクト同様、肩にそのハヤブサを乗せると、

「シーパって言います。よろしくお願いしますね」

「……もしかしくなくても、その子も空から探させるんですか?」

鈴が鳴るような、清らかな声を聞いてタクトはそう思った。するとセシリアは、

「ええそうよ。それにこの子、何度か奴を探し出しているから。ね、

シーパ」

そう問いかけると、シーパは「はい」と頷いて答える。彼女（彼？）も、やる気満々のようだ。

「うーん……じゃお願いします。僕たちは学園の中を探しましょう」

「ええ、わかったわ」

そう言うと、セシリアと共に廊下をかけだし、精霊達は窓から外へ出て、空高く飛び上がってギリの搜索を開始した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1288u/>

---

精霊の担い手

2011年11月20日21時40分発行